
時と世界を越えた魔法剣士

甘党代表

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と世界を越えた魔法剣士

【Nコード】

N4921V

【作者名】

甘党代表

【あらすじ】

異世界に迷い込んだ青年、リツ。魔王討伐を成し遂げた直後、今度は時を越えてしまう。たどり着いたのは、リツが消え去ってから約1000年後の世界。勇者パーティの一員、最強の魔法剣士として名を馳せたリツは、気の赴くままに旅することを決める。波乱万丈なりつの運命は、いったいどこへ向かうのか。*ギャグあり、シリアスあり。ネタ多目ですが、生暖かく見守ってくださいませとうれしいです。更新は不定期。亀更新になるかもです。

エピソード プロローグ(前書き)

熱いパトスを止められませんでした。

エピソード プロローグ

剣を握る腕は重く、前を見据える目には力がない。僕はそのことを自覚しながらも、5年を共に生き抜いた相棒をしっかりと握りなおした。と、すぐ隣から勇ましい声が聞こえる。親友であり勇者のライトだ。赤い髪を自身の血でさらに赤く染め、その端正な顔立ちも泥と血にまみれている。

「リツ！魔力はまだ大丈夫か!？」

「ああ、まだいける！魔法剣は、さすがに連発できないけど」

「なら、俺に『ブースト』と『フレイムエンチャント』をかけてくれ！これでトドメをさす！」

「……わかった！『ブースト』『フレイムエンチャント』」

強化系の『ブースト』と、属性付与の『フレイムエンチャント』をライトにかけると、彼はすぐさま走り出した。後ろで気を失い、ぐったりとしている法術士のウエンディを見て逡巡した直後、僕もライトの後を追う。

ここは魔王城の玉座の間。数々の戦いを潜り抜けてきた僕たちの旅の終着点とも言えるだろう。その終着点では、黒いマントで身を包んだ銀髪で青白い肌の男が、仁王立ちしている。

魔王シェイド。5年前に僕らの世界を混沌に陥れた、魔族の王だ。人間の領土に侵攻してきて、略奪の限りを尽くしている。その魔王を討伐するのが、僕らの役目なのだ。勇者であるライトには、魔王との並々ならぬ因縁があるらしい。

「愚かな人間どもよ……我に逆らったこと、後悔するがいい！」

「後悔するのはそっちだ！俺は……俺の信念を貫く！！うおおおおおお！！」

ライトが握っていた剣を一闪させる。魔王も手に持った漆黒の剣で、タイミングをあわせて受け流す。そのやり取りは十数合におよび、一層激しさを増していった。僕はライトの助けになるよう、防御力強化魔法の『シールド』、速度強化の『イベイジョン』を彼にかけた。

ふと、ライトが魔王の振った剣に合わせて、こちらまで飛び下がった。入れ替わりに僕が、剣を携えて魔王へ挑む。

「くらえっ、『フレイムベイン』！」

「ぬっ！」

炎の槍を射出する『フレイムベイン』を発動させ、気を逸らさせた瞬間に一閃。時折魔法を織り交ぜながら、魔王と切り結んでいく。この世界に『墮とされて』5年、今じゃ世界でも最強に名を連ねるほどの魔法剣士となったんだ。魔王の攻撃はすさまじいものがあるけれど、僕だって負けてはいない。

魔王を挟んで僕とライトが攻撃を仕掛ける。ライトの持つ聖剣『グランシャリオ』の赤い残像と、僕の持つ魔剣『シルヴァリオ』の青い残像が激しくダンスし、魔王を追い詰める。青白く神秘的な魔王の相貌に、焦りがにじみ出てきた。

「でやああああ……！」

「出でよ、神のいかずち……！！！」

それからどれくらい経っただろうか、ライトの剣がついに、魔王の右腕を斬り飛ばす。その痛みにひるんだ隙を見逃さず、僕は僕だけの必殺技、『魔法剣』を発動した。全魔力をこめた、大盤振る舞いだ。

「これで最後だ、魔法剣『インデグニション』……！！！」

「ぐつ、そんな……そんなバカな！ぐああああ！！」

昔ハマツた某RPGの技名をもとに作った技だったけど、まさか魔王まで乗ってくれるとは……ッ！いや、まあ魔王も乗ったわけじゃないんだろっけねど。

顔は大真面目に、思考は馬鹿なことで埋め尽くしながら、雷光を纏った魔剣で魔王を貫く。一瞬の硬直の後、魔王は鮮血を口から零し、倒れ伏した。

「……やった」

「や、やったじゃないカリッ！俺は、俺たちは勝ったんだ！！」

「魔王に……魔王に勝った！！」

喜びが、全身を満たしていく。魔王討伐を心に決めてから苦節5年、様々な修羅場を越えて、ついに終わった。勇者のライト、後ろで気絶している法術士のウエンディ。この城の魔力駆動炉を止めに行った闘士のバーンと魔術師のミュール。長かった5人の旅は、これで終わったんだ。

「おーい！魔力駆動炉は止めてきたぞ！」

「やっぱり爆破術式が込められていたわ。大陸ごとぶっ飛ばすつもりだったみたい」

ライトと共に気絶したウエンディを介抱しているうちに、バーンとミュールが戻ってきた。見たところ2人には大きな怪我もなく、僕はそつと安堵の息をつく。バーンがその自慢の筋肉を盛り上げながら、自分の武勇伝を語っているのを尻目に、ミュールは僕に歩み寄ってくる。トレードマークのとんがり帽子が、やや煤けて見えた。

「お疲れ様。そっちもずいぶん派手にやられたわね」

「かなり手ごわかったからね。まあ、なんとか無事ではあるかな。魔力もからっぽ」

「フフン、この大魔導師ミュール様が居たら、一瞬だったのにね？」

「はー、御見それしました」

「ぶっ、なにそれ」

後ろから、僕の名を叫ぶみんなの声が聞こえたが、構っちゃいけない。僕は最後の力を振り絞り、咆哮と共に魔方陣へと剣を突き立てた。

キイイイインツ。

世界は色を、音を、匂いを、感覚を、失くす。この感じは、人生で2度目だ。召喚は無事に止まったみたいだけど、僕の体は消え去っていく。

もう会えない。悟った僕は、仲間たちの顔を見つめる。気絶しているウエンディ以外、みんな必死な顔でこちらに駆けてきている。

9

「さよなら、楽しかったよ」

笑顔で言えたのだろうか。声は震えていなかっただろうか。今はもう分からないが、上等な結果だったと思う。

こうして僕、葉山 律は、再び世界から姿を消した。

魔法剣士リツ、日本人です（前書き）

実は短編なんかで、魔王討伐時代の話とかやりたいなあって思ったり……。

魔法剣士リツ、日本人です

なん、だ……？なにが……。

僕の意識は、そこで急速に浮上する。目を開けると、生い茂る木々の合間から、木漏れ日が振ってきた。空気は澄み渡り、遠くでは鳥の鳴く声も聞こえてくる。どうやら森の空き地にも飛ばされたみたいだ。

手早く自分の周辺を確認。相棒、路銀、携帯食、応急キット。どうやら問題ないらしい。いつの間にか体中を苛んでいた痛みは消え、むしろ生まれ変わったかのように清々しい。魔力が満ち満ちているのを感じる。

「……………ッ！みんなは！？」

と、そこでようやく先ほど自分の身に起きた出来事を思い出す。僕はあの膨大な魔力の奔流に飲み込まれ、てっきり存在ごと消滅したものだ……………。

辺りを見回しても、僕以外には誰も居ないようだ……………分かっていなかったのだが、少し落胆する。結局のところ、ここはどこだろうか？

まあ、こうして生きているのだ。ここがどこかは皆目見当がつかないが、とりあえず僕らの出発地点であるアーガルド大陸を目的地

にしよ。

「『サーチ』……水場があるのか」

当面の目的も決まったし、とにかく今はのどが渴いた。水筒は空っぽだし、今からまた旅を始めるとなれば、水と食料の確保は最優先事項だ。魔法で調べたところ、幸いにも水場は近くにあるようなので、今日はそこで野宿することに。

全身に速度上昇の『イベイジョン』を重ねがけし、文字通り”飛んだ”。

「おおわわわあああああ！？」

予想以上の推進力に、驚きの絶叫を轟かせる。近くの木々から、一斉に鳥が羽ばたいた。

どういうことだ？使い慣れた魔法なのだが、あまりにもあまりな効果の”効きすぎ”に啞然としてしまう。

無様に空中を舞いながら集中してみると、ありえないほど空気中に魔力が充満している。それも、見渡す限り全てが。森も、空も、

大地も、魔力含有量が凄まじいのだ。

「ッ……『エアライド』」

ともあれ、驚いてばかりも居られない。空中を走るために僕がミユールと共に研究した呪文、『エアライド』を使用し、ゆっくりと地上に降り立った。まあ、一瞬空中での姿勢制御に失敗したけれどね。『エアライド』まで効きすぎていた。

運よく降り立ったのが水辺で、綺麗な川が目の前を流れている。覗き込むと、久しく見ていなかった自分の顔が見て取れる。

黒髪黒目という、この世界では極めて珍しい特徴。もちろん、僕が地球の日本出身であるという証でもある。しばらく切っていないから長めで、ツンツンとした髪形になってしまっている。5年前の中学生の頃より、だいぶ成長した顔つきになった。とは言っても、いまだこの世界だと幼く見られてしまうんだが。でもまあ、不細工ではないと思う……思いたい……思わせてください。

男にしては低めの身長だが、筋肉はつきすぎずつかなすぎずと言ったところか。それでも華奢には変わりないので、全身をすっぽりと覆い隠すフード付きの黒いローブが誤魔化している。その下はいたって軽装で、腰に相棒である蒼の魔剣『シルヴァリオン』、背中に愛杖の銀色の杖を差してある。

「まあ、これでも魔王討伐パーティの一員だし。さすがに板についてもくるよね」

日本に居た頃は冴えない純情ボーイだったけれど、今年で20の僕はいろんな意味で大人になりました。（人殺しを経験したという意味で）

え、彼女？……強くなることしか考えてなかった結果がコレだよ！5年間汗と血の匂いでいっぱいだったよ！なんか文句あるかゴラアアアア！！

僕、みんなの元に帰ったら、ミユール（183）にプロポーズするんだ……。あ、ミユールは長命種のハイエルフだからね？ババアとか言っちゃだめだよ？人間で言う18歳くらいだそうだし。

「おい、兄ちゃん……有り金と食い物」

「……っと、アホなこと考えてないで、お仕事お仕事」

「よこしんぎゃっ…」

無詠唱で『ソニックブーム』を手のひらから放出する。木の陰でこちらを窺っていたうちの1人が、両断されて絶命した。殺気がダ

ダ漏れだよ、素人め。

水場にたどり着いた時点で、木々の間からこちらを窺い見る複数の気配は感じていた。そのほぼ全てに殺気が含まれているなんて、もう野盗で決定だ。仲間が1人殺されたのを見てか、手に手に武器を持って出てくる。その数およそ、20。

一様にぼろの服装をしていて、ザ・盗賊ルックって感じた。ダサい。

「野郎！おとなしく身包み置いていきやがれ！！」

「おりやつ、『フレイムアロー』！」

「ぐはっ！…！」

あっちゃー、しまったね。こういう天然の水場って、野盗の拠点なのが常識じゃないか。「ひぎっ！」はい2人目。それにしても仲間がやられたのにこの冷静さ、軍人崩れとかかな？

「気をつける、奴は相当の……がっ！」

「ひ、ひいひい！ばけもっじぶっ」

「や、やめろ、来るな来るな来るなあああ！！」

おうおう、逃げる逃げる。大の大人がみつともなく命乞いして逃げるよ。あんたらはそうやって命乞いしてきた人たちを、どうしてきたんだろうね？

経験上、こつという輩は情を見せれば同じことを繰り返す。だから一時的に心を凍てつかせて、殲滅する。

追尾式の『アイスニードル』で、トドメ。僕の周りに、生き物は居なくなった。血の匂いが漂う中、水筒に水を補給する。

「ふう、やっぱり慣れないな……」

初めて殺しをしたときは、ホントに散々だったけどね。泣いて喚いて取り乱して、みつともなく現実から逃げたもんだよ。ウエンディにぶん殴られるまで、発狂してたからね。ウエンディに抱きしめられて、ワンワン泣いたのは過去現在未来合わせても、最大の黒歴史だと思う。

この話の流れだったら、ウエンディに惚れるよね？でも、あの子は大親友のライトと相思相愛だし。もともと好みではなかったから、恩義はあるけど恋心はなかったなあ。

それよりミユールだよ！典型的ツンデレさん。あの尖った耳もさることながら、手のひらに完璧収まりそうな小ささの胸が（ry

まさにドストライクなわけです。ただ、ミユールは僕の魔法の師匠だったから、この思いは内に秘めてただけだね。

いい機会だから僕と仲間たちとの関係をざつと紹介しよう。ライトはこの世界に紛れ込んだ僕に手を差し伸べてくれた、初めての人間。旅の始まりは、僕とライトの2人だったんだ。旅の間色々あったけど、助け助けられ、いつしか親友になっていた。あとイケメン。

ウエンディは、正直第一印象が互いに最悪だった。実は大国の姫君なんだけど、イケメンで勇者なライトの旅の連れとしては、僕の存在に納得行かなかつたらしい。まあ、そのときは僕、駆け出しも駆け出したから仕方ないんだけど。共に戦ったり、ライトとの間を取り持ったり（これが理由としては大きいような気がする）しているうちに、いつしか認めてくれるようになったみたいだ。あと巨乳。

ミユールは言わずもがな、僕の師匠で想い人。長い金髪を後ろで一本の三つ編みにしていて、黒いとんがり帽子が特徴の魔女っ娘だ。いつも飄々としているが、照れると素直になれなくなり、結果ツンデレキャラに落ち着いた。大火力の広域殲滅魔法は圧巻の一言。魔法だけだったら勝てる気がしない。隠れ里を飛び出してきたやんちゃなハイエルフで、僕の潜在的かつ膨大な魔力に目をつけて、いきなり僕を弟子にした人だったり。彼女には大きな大きな借りがある。それを返すためにも、早く再会したい。あと貧乳。

バーン？あんな脳筋知らん。

「みんな、あの後大丈夫だったかな？誰も大怪我してないといいけど」

さて、だいぶ長いこと回想してたけど、水の補給も終わったし、そろそろ町に出発しよう。ここがどこかは分からないけれど、世界中旅したわけだし、どこかしらの町に行けば、すぐに現在地が割り出せると思う。

ふう、と一息。全身に魔力をみなぎらせる。思い浮かべるは飛翔する自身。『エアライド』

「ぴゃあああああああああ！！」

……効果の増大、忘れてたorz

魔法剣士リツ、日本人です（後書き）

色々推敲してみました

魔法の言葉、ハーバマ（前書き）

主人公・リツのキャラ付けは、巻き込まれ系不幸青年です。
神から見放されたといっても過言ではない神浄の討魔さんより、あ
る意味夕チが悪いかも……？

魔法の言葉、ハーバマ

目覚めた森に程近い町、クラウリア。この町にたどり着いて感じたのは、違和感だった。

「（名前も聞いたことない町だな……もしかして、相当辺境に飛ばされた？）」

木々の暖かさを感じる建物と、穏やかに生活する人々。見たところ様々な種族が生活しており、種族間での争いなどはないようだ。少し、安心した。

だが、なんだろうかこの違和感は。こう、知っているのに知らないというか、目の前にある答えになかなかたどり着けない、もどかしさ。

……いつまでも悩んでいても仕方ない。とりあえずは情報収集としようか。

僕は宿屋に隣接する酒場へと、足を踏み入れた。

「いらっしやい。旅人さんでしょうか？」

中は全体的に明るく、落ち着いた雰囲気の流れるバーだった。壮年のマスターが醸し出す雰囲気、マツチしている。昼時ということもあってか、バーには客がまばらであった。

スーツに、キュッキュツとグラスを磨く様子は、まさしくバーという感じである。

「ええ、まあ。いいお店ですね」

「ふふ、ありがとうございます。ご注文はいかがでしたでしょうか？」

「マジックカクテルを」

「かしこまりました」

少し経って出されたのは、青と緑が幻想的に混ぜり合う、なんとも不思議なカクテルであった。魔法を使用した特殊な製法で作られ、その店その店で味が違うという代物である。

僕は香りを楽しんだ直後にグラスを傾ける。さっぱりとした味わいで、ほんのりと果実のような甘みがある。いい味に機嫌をよくしながら飲み干し、情報を聞きだすことに。まずは、アーガルド大陸がどの方角か、だな。

「マスター、聞きたいことがあるんだけど」

「なんでございましょう」

「アーガルド大陸って、ここからだどの方角かな？」

「ううむ、ここがリセリア大陸ですので、アーガルドの地ならば北東でございましょうな……旅人さん？」

……………は？いや、え？

え、ここ……………リセリア、大陸……………？

いやいやいやいやいや、ちょっと待とうか落ち着け僕。リセリア大陸？ここが？

魔…王…城…が…あ…っ…て…、魔…物…の…巢…窟…と…な…っ…て…い…る…は…ず…の…、リセリア大陸？

「どー、なってるの……………」

「はあ、なにか問題でもございましたかな？」

「あ、いやいや」

「てつきり旅人さんも、この町にある石碑を見に来たのかと」

「……石碑？」

「魔王が討伐され、この世界に平和の灯火が宿った、記念碑でございますが……」ご存じなかつたので？」

「あつ……あ、ああ、その石碑ね、うん。知ってた、知ってたよ？」

魔王が討伐され、世界に平和が？もしかして、僕が目覚めたのつて、魔王討伐からだいぶ後なのかな？

少なくとも、あの荒廃した大地が、今みたいに緑でいっぱいになるわけだし。相当の年月が経ってるんじゃないか？

……とにかく、その石碑を見てみよう。

「ありがとマスター、これ代金。釣りは取っとして！」

「あ、はいありがと……ッ!？」

後ろからなにやら驚愕した声が聞こえてきたけれど、今は構っている余裕がない。少し本気で、町を走り抜ける。途中、こちらを驚

いて振り向いてきた人たちもいるが、今は全く気にならなかった。

町の中心に、大きな広場を見つけた。見たところ公園のようになっている。子供たちがのどかに笑っている姿が見受けられる。その広場のさらに中心に、黒い大きな石碑がたたずんでいる。

胸が、バカみたいに鳴り響く。脳が碑文を読むことを拒否する。だが、僕はそれらを強引に押さえつけ、読んだ。否、読んでしまった。

『アーガルド暦1673年

創造神の息子、娘である我ら民草は、ここに平和の礎を築いた者たちへと敬意を表する。

紅剣の勇者 ライトⅡミレフィスⅡアーガルド
癒しの姫巫女 ウェンディⅡフライヤⅡアーガルド
黄昏の大魔導師 ミュールⅡクーヴィア
鉄腕の拳帝 バーンⅡオルガ

そしてその身を犠牲に世界を救った大英雄。

蒼空の魔剣士 リツⅡハーバマ

2度と、この世界に闇が降りぬことを願って』

うん、まずは言わなきゃいけないことがあるよね、うん。

魔法の言葉、ハーバマ（後書き）

Side 残されたマスター

「……………どうすればよいのでしょうか」

手元に残されたのは、あの魔導師風の少年が残していった硬貨。アーガルド暦1000年製造の、バハムト銀貨である。

現在使われているベヒモス硬貨よりもはるか太古の時代に使われた硬貨である。それも、あの救世の勇者たちの活躍した時代の。

彼はこの硬貨が、どれほどの価値を有するのか理解しているのでしようか……………？

骨董商や貨幣商など、持って行くところに持っていけば、大金を積んでももらえるでしょうに。

実際、彼の飲んだマジックカクテルの価格はベヒモス銅貨5枚である。これでは、私ばかり儲けてしまっただけでは居ないでしょうか？

仕方ありません、これから彼が来店した折には、持て成せる最高のサービスを心がけさせていただきますしよう。

少女マンガって無駄にヒロイ(前書き)

主人公に迫る困難(笑)フラグ

少女マンガって無駄にエロい

5000年。僕が魔王城から飛ばされて、それほどの年月が経った後にこの石碑は出来たらしい。という事は、今は少なくとも500年以上、もしかしたらもっと遠い年月が過ぎているのかもしれないのだ。

あまりのことの大きさに、眩暈が起きそうだ。みんなの元に帰るなんて、もう無理だと分かってしまったから。

これは……そう、初めて僕が、元の世界に帰れないと知ったときの絶望に近い。帰る場所がない。親にも、友にも会えない。こんな見知らぬ地にほっぽり出され、しばらくはワンワン泣いたっけ。

今回はもう、涙すら流れない。今回はライトたちという『居場所』があったが、今回はもう何一つとして残っていないのである。正真正銘の天涯孤独。夢も希望も、ありやしない。

「……まずは情報収集、かな」

ともあれ、ここでずっと立ちすくんでいるわけにもいかないだろう。とにかく何かして、気を紛らわせなくては。

そしてしばらく旅人のフリをして、村人や冒険者から情報収集をする。ことここにいたって、ようやく周辺の状況を把握することが

できた。

曰く、現在はアーガルド暦からトウグルス暦へと呼び名を改めており、今はトウグルス暦54年であるということ。

曰く、ここ数年で大陸の勢力図は大幅に変わり、多くの国々が独裁国家であるトウグルス帝国の傘下に堕ちつつあるということ。

曰く、トウグルス帝国の影響で、世界中の治安が悪くなってきているということ。

曰く、僕たちの始まりの地アーガルド王国は、滅亡の危機に立たされているということ。

……ええつと、魔王の次は帝国ですか。

「あれ、僕つてもしかして、誰かの都合のいいように召喚されたのか？」

前回は、今回も。前回は、魔王という脅威に対抗する手段として。今回は、トウグルス帝国という脅威に対抗する手段として。何か、人智を超えた存在によって、体のいい掃除屋にされているんじゃないかな。

「……なんてな。んなことあるわけねえっつの」

今考えた、理屈も何も通らない、荒唐無稽な誇大妄想を脳裏に引っ込め、自嘲する。僕はあえて、これ以上考えるのをやめた。

とにかく当面の目標は、帝国がどんな理念の下にどんなことをしているのかを調べ、それが僕の許容できるものでなかった場合は…
…潰す。

アーガルド王国はどうやら、僕の親友が守ろうとした国のようだし、そう易々と滅ぼさせるわけにはいかないんだよね。

それでも最強の魔法剣士とか言われた身だし、個人の力で世界に劇的な影響を与えるほどではないにしろ、何らかのキツカケ程度にはなるはずだ。

よし、そうと決まれば、まず目指すはアーガルド王国。拠点はどこにでも必要だし、あの王国が現在どんな状況なのかも知りたい。

「そういえば、この大陸の南端に、港町があるって言ってたな」

ある村人から聞いた話だが、この大陸の南端にある港町で、近々祭りがあるらしい。なんでも開拓が完成した年から今まで続いているらしく、情報源の漁師風の男は嬉々として語ってくれた。なんで

も、土地神様とやらが降臨するらしい、ありがたいお祭りなんだとか。

これは行ってみるしかないだろう。ちょうど通り道であるし、興味もひかれる。なにより土地神なんて胡散臭いものが本当にいるのかどうか、見ものだ。

ちなみに。

「クックック……」

黒マテリア、とかいいそうな笑いで町を歩いていた僕が、『怪しい黒づくめの男』と噂になっていたのは、完全に余談である。

くすんだ木の床、軋むカウンター、黄ばんだ依頼用紙の張り出された掲示板……！

「ここが、ギルド……!!」

「おい兄ちゃん、邪魔だから入り口に突っ立ってんなよ」

「あ、すみません」

って言っても、ギルドだよギルド！ゲームや漫画の世界にしかなかった、いわゆる厨二の代名詞！

ギルド最強になったり、四天王の的になったりって、ある意味憧れじゃんか！

情報収集でたまたま耳に入れた情報で、ギルドというものがあることを知った。ギルドとは依頼を民間人や国、政府が持つていき、ギルド所属の冒険者や旅人が報酬と引き換えに依頼を請け負うというものである。

ギルドが規定している難易度などにも分けられ、無茶な依頼はよほど名の知れた人物でなければ請け負えない場合もあるらしい。

なんとまあ、僕が飛ばされたウン百年の間に、画期的なシステムが出来たこと。僕らの時代だと、依頼とかそう言うのは行きずりの冒険者に、つてのが主流だったからねえ。実際に、僕らはその依頼などをこなして生きていたわけだし。

「すみませーん、登録お願いします」

「かしこまりました。ではここに、氏名・年齢・クラス・特殊技能を記入してください」

「了解です」

受付の女の子が、書類を渡してくる。前掛けのよく似合う、素朴な女の子だ。とりあえず必要事項を記入して、受付に返すと、書類は受付の持つ水晶に吸い込まれていつてしまった。

ちなみにクラスとは、戦闘スタイルのようなものである。僕だったら魔法剣士だが、今回は魔導師にする。あまり手の内を見せないほうがいい気がするのだ。

「はい、ありがとうございます、リツ様ですね。登録完了いたしました。それにしても蒼空の魔剣士様と同じ名前とは、ご両親は大層英雄譚サーガがお好きなのでしょうね」

「あ、あはは……あまり僕は英雄譚には詳しくありませんので、そこらへんはよく分かりませんね」

「ええ！？蒼空の魔剣士様を知らないのですか!？」

と、そこで受付嬢は、ギルド中の視線を集めていることに気づく。あまりに大きな声を出していたため、注目されてしまったんだろう。

赤くなって小さくなる受付嬢に、小声で続きを促す。自分の知らないところで出来上がった虚像に、興味を抱いたのだ。

なにより僕はその蒼空の魔剣士（笑）本人である。厨二な二つ名を命名したド畜生は誰なのか、絶対に突き止めてやる。

「えっと、蒼空の魔剣士様は、世にも珍しい黒髪黒目でして……って、リツ様も同じ特徴ですね！」

「いや、まあ……いいから続けて！」

「あ、はい。多種多様な魔法を操り、近距離では蒼く光る魔剣であらゆる敵を切り伏せたと聞きます」

「うんうん」

「最終決戦の折には、自滅する魔王にトドメを刺し、自らを犠牲にして世界が滅びるのを防いだのだそうです」

「うんうん」

「一方で、女性関係には碌な目にあつたことがなく」

「うんうん……うん。」

「癒しの姫巫女様に求婚してこっぴどく振られ、『もう女なんて信じない』と当時親友であった紅剣の勇者様に熱き想いを」

「ちよつと待て」

おいコラ、どこのどいつだこんなデマ流したの。絶対に見つけ出して生まれてきたことを後悔させてやる。

ってか、まず何でウエンディに僕が求婚せにやならんのだ！そして何でライトに熱いパトスを感じなければならんのだ！

僕が好きなのはミュール！そうだ、ミュールはどうなったんだろ
う！？

「あの、黄昏の大魔導師……様はどうなったんですか？」

「……？あ、ファンなんですか？そうですよね、同じ魔導師だし、憧れちゃいますよね！」

「あ、うん。そうなんだ」

そっか、大魔導師とか言われるほどだし、世界の魔法を生業とす

る人たちからは尊敬されているのも当たり前か。もし僕が、その黄昏の大魔導師の弟子だと知ったら、みんなどう思うんだろう。

「黄昏の大魔導師様は、どうやら蒼空の魔剣士様の魔法の師匠だったらしくてですね。それはもう、長い間彼が亡くなったことを哀しんだようです」

「……そっか」

ミュールは、哀しんでくれたのか。いや、哀しませちゃったのか。本当に悪いことをしたなあ。でも、心の隅に悲しんでくれて嬉しいと思う歪んだ自分がいる。それを自覚して、少し惨めになった。

「そして彼女は彼を失った孤独を埋めるため、鉄腕の拳帝と毎夜毎夜ただれたカンケイを……」

「うおおおおいッッッ!!」

「あ、これはこの前読んだ女性向け小説『汚された大魔導師』のワンシーンでした!」

「う、うおおおおい……」

やめろよ！マジでやめろよ！よりによって相手がバーンとか、洒落になんねえよ！！てかそれ、本当に女性向けなんですか！？

「事実は分かりませんが、一説では隠れ里で引きこもって怪しい実験を繰り返して、いつの間にか跡形もなく消え去ったそうです。遺体は見つかっていないものの、死んでしまったと言われていますね」

「え、そうか……」

……やっぱり、そうなのか。一度エルフの隠れ里を探してみるのもいいかもしれない。ミユールの痕跡が、辿れるかもしれないから。

と、だいぶ時間をとってしまった。結局真実は分からずじまいだが、まあ、有意義な時間ではあった。なんだか散々な目にあった気がしないでもないが。

教えてくれてありがとう、と受付嬢に一礼し、掲示板の方へ足を向ける。その際、発行されたギルドカードというものをもらった。

ランクは最低のE。今回は様子見で、隊商の護衛かなんかをやろう。

ちょうど港町方面へ行く隊商は……お？

『護衛依頼！』

港町アーセナルへの護衛をお願いしたい。物資は食べ物や反物など、温度の変化に弱いものが多い。そのため、魔導師を求めている。請け負ってもらえる方は、宿屋「水鳥」へと足を運んでもらいたい。

人数・・・4人まで

クラス・・・魔導師

ランク・・・D

報酬・・・50ベヘモス銀貨

依頼人・・・宿屋「水鳥」に宿泊中、マーカス」

ふーん、護衛ね。キャラバン 隊商ではなく、個人の商人か。なんとなく、金払いがよさそうな気がする。

それにしても、ベヘモス……？バハムトではなくって？

その後僕は、もう一度あの受付嬢の下へ行き、硬貨について説明を受けるのだった。なんだかやるせねえ。

少女マンガって無駄にエロい(後書き)

回収は名も無き受付嬢でしたw

そして隠れ里への訪問フラグ。

次回はどんな不幸がリツに降りかかるのか……乞うご期待！

普段温厚なやつほどキレると怖い(前書き)

今回は不幸度低いですね。

酷い目にあわせたいなあw

普段温厚なやつほどキレると怖い

2頭の馬がひく馬車が、街道をのんびりと進んでいく。街道とは言ってもちゃんと整備されているわけじゃなく、馬車などに踏み固められて出来た道なのだけけれど。

その周りでは、3人の魔導師風の人影が、馬車を守るように配置されている。女が1人に男が2人だ。

「……なんで魔導師しか雇わなかったんだらう？」

「はっはっは、リッさんそれはですね！積荷を交代で冷却してもらうためですよ！一人が冷却、残りが護衛という具合にですね！」

荷台で積荷に冷気を送りながら一人ごちると、御者をしているでっぷりと太った男から返事が来た。このエクスクラメーションマーク（！）がやたらと多いオッサンが、今回の依頼人であるマーカスさんだ。

それにしても、そんなに単純な話なのか？普通護衛といたら、前衛と法術士は必須だろうに。

それを聞くと、オッサンはあごの肉を震わせ、悲しそうに目を伏せた。

「……………お金がないんです」

そうですね。

1日の行程が終わった。今は街道の隅で野営の準備中である。

「それでよー！その盗賊に俺は言ったんだ！『やめろ、俺の火球が火を噴くぜ』……………ってな！」

「ふーん」

「あ、あとこんな話もあるぜ！あれは今から2年前のことだったか……………ry」

野菜を刻んだり、スープに味付けしたりしながら、横のバカの話
を聞き流す。隣の男はリッキー。なんだか僕に突然自分の武勇伝を
語りだし、迷惑極まりないことに分担された役割をこなしていない。
そのため、なぜか僕がコイツの分までやっているのだ。

あー、なんかかなりムカついてきた。でも我慢我慢、あまり実力
見せるようなこと、できないからね。

容姿は伝わっている蒼空の魔剣士（笑）そのまんまだし、魔法も
なんだか強力になってるし。それに「シルヴァリオン」はまんま伝
承の魔剣だから、絶対に人前では使えない。

すっごく……フラストレーションが溜まります。

「ちょっと、そこの！あんた役割ロールもやらずに何やってんのよー！」

「ちっ……うるせー女が来やがった」

「あんたねーっー！」

そのまま横でギャイギャイと怒鳴りあう2人。いい加減にしてほ
しいです。

後から来た女の子はシルヴィア。なんでも王立なんちゃら魔法学

院の生徒なのとか。いいねえ学生、青春ですわ。」

緋色のふわふわした髪を肩口で切りそろえてあり、ちょっと釣り目でキツイ印象だが美少女である。小柄で運動神経もまるでないが、魔法には自信がある……らしい。

「もー、あんたからも何とか言っつてやんなさいよ!!」

はい、僕も巻き込まれましたー。

「あー、つと。別に僕がやっておくからいいんだけど？」

「おお！さすが俺様の一の子分！分かってるじゃねえか!!」

「甘やかさないの！第一、あたしだって自分の役割こなしてるのに、不公平じゃない!!」

「……じゃあ、そっちも僕がやるよ」

「え……？いや、悪いわよ!!」

「けっ、結局てめえも同じじゃねえか」

「あ、あんですつてえええ!!?」

その声を無視して、黙々と作業をこなす。料理の下ごしらえはできたし、あとはシルヴィアの役割かな。

なんかこの面子だと、分担するより1人でやったほうがはかどるや。

シルヴィアの役割は、簡易テントの設置。女の子1人でこれをするのは大変だろう。まあ、彼女が料理できないというから、こうなっただけだが。

シルヴィアはすでに1つ建てていたらしく、残りは後2つになっていた。男が2人ずつ入り、女が1つを使うという振り分けだ。

もう1人の魔導師はかなりの高齢で、ときどき「こいつ死んでるんじゃないかねえ？」って感じに活動停止することがある。今は休眠モードのようだ。マーカスのオッサン？あの体型でできるとでも？

「ほいつ、ほいつ」

と、つらつらと考え事をしている間にテント設営完了。ライトたちと旅してたときも、ずっとやってきたことだからすぐに終わった。体に染み付いた習慣ってすごいよね。

「ごめんごめん、手伝いに来たよ……って、早!？」

「ああ、ごめん。終わらせちゃったよ」

「す、すごいわね……そんな細い体でどうやって……?」

ああ、そういえば。漫画みたいな身体能力を強化する魔法なんて、この世界には存在しない。魔力を体内で無理に循環させようとしたら、体中の血管が破裂してしまうのである。僕もミュールに「身体能力を強化する魔法ってないのー?」って聞いてみたんだが、「横着せずに努力しなさい」ってビシリと言われたんだよね。

それからみんなで食事をして、早めに就寝。明日は早いから、休んどくべきだそう。

で、周りの連中は見張りなんて出来そうにないから、僕が名乗り出る。シルヴィアがあわてて休んでていいとか言い出したけれど、丁重にお断りした。

もともと3日3晩無休で働けるぐらいの体力はあるし、そもそも会ったばかりで実力を信用できない、緊張感の無い連中に見張りなんて任せたくない。

べつ、別にみんなのためを思ってなんて、そんなんじゃないんだからね!!

.....？

.....お。

「おい兄ちゃん。その後ろの馬車の中身よこさな」

ぐしゃっ。

「「ぼっ.....ボオオオオブ!!」」

「あ、ごめん。なんか反射的に」

「て、てめえふざげやがって!!」

「ボブの仇だこの野郎!!」

夜盗ぽいのが3人、野営地を訪ねてきた。そのうちの1人を『アイシクルダガー』という氷の刃を飛ばす魔法で殺害。

それにしても雑魚キャラ臭がプンプンするなあ、こいつら。向かってくる2人に蹴りを食らわし、距離をとる。

うん、いいストレス発散になりそうだ。

「覚悟しなよ……今の僕は、ちょっと機嫌が悪いんだ」

慣れてるって言っても眠いんだよチクシヨウ!!

普段温厚なやつほどキレると怖い（後書き）

実力発揮できないって、イライラしてきますよね？

護衛任務中、リツくんは常に力をセーブしてました。

だから護衛チームメンバーからの評価は、弱くも強くもない奴ですw
次回、早々に実力バレ……か？

既視感って結構頻繁に起こるよね？

「えー、皆さんと共に護衛任務に当たっていた熟練魔導師のガラムさんですが……朝起きたら眠るように亡くなっていました」

「……ええっ!?!?!」

「私のほうが『ええっ!?!?』ですよ!朝起きたら白眼剥いたジジイの仏さんがどアップですよ!?!?『ええっ!?!?』どころか『ぎゃああぁあ!?!?』でしたよ!?!?」

野営の一夜が明けて、みんなが集まるなりマークスさんから重大発表があった。高齢の魔導師ガラムさん(92)が、亡くなったらしい。

まあ、仕方が無いと思う。だって、もともと生きてるか死んでるかすら分からない爺さんだったもん。

よだれを垂らし白眼を剥いた老人の死体は、なかなか見ている者には苦だ。青紫色に変色しきった舌は、だらしなくビロンと口外に投げ出されている。

「これ……絶対苦しんで死んだよね」

「リッさん……苦しむ声とか聞こえなかったんですか?」

「え、えっと……と、特にはー？」（夜盗の断末魔で聞こえなかったとは言えない）

「の、呪われそうだな……幸先わりい」

「あ、あんた呪いだなんて……不謹慎よっ」

「な、なんだとう」

心なしか、シルヴィアとリックキーの掛け合いにもハリが無い。早朝からの突然のアクシデントに、ダウンナー気味の面々であったり。ガラムの爺さんの仏さんは、正直トラウマもんである。

「そうか……分かったぜ」

「な、何が分かったのですかなリックキーさん……？」

「ふっふっふ、謎は全て解けた!!」

「「「な、なんだってー」」」

「犯人は、この中にいる!!」

突然、満面のドヤ顔と共に言い放つリックと、それに棒読みで驚いてみる僕ら。それにしてもこいつら、ノリノリである。

「犯人は……リック、てめえだ!!」

「つつつ!!」

「お前は見張りという立場を利用し、ガラムのじじいを殺害した!!」

「そ、そんな……」

「なんと、リックさんが……」

「ち、ちがう!僕じゃない!!」

「いいぜ。てめえが認めねえんなら、こっちにも考えがある」

そうして、リックが懐から取り出したのは……黒の、髪の毛……!!??

「この中ではてめえしか生えてない、黒の髪の毛だ。これがガラムのじじいの遺体のそばに落ちていたんだ」

「そ、それじゃあやっぱり犯人は……」

「……あなただったのね、リッさん」

「違う違う違う!! 僕は………僕はっ!!」

「いい加減にしゃがれ、往生際がわりいぞ!!」

バサリと、木々から鳥が飛び立った。リッキーの怒声が耳朵を打つ。

シンと静まり返った場で、1人だけ動くものがいた。リッキーだ。リッキーは俯く僕の肩を抱き、力強く僕に声をかける。

「……お前は俺の子分だろ。なんで1人で抱え込むんだ」

「リッキー……いや、兄貴……!!」

固く結ばれる友情に、シルヴィアとマーカスさんは静かに涙を流した。

「って言う夢を見たんだぜ」

「はいはいバカバカ」

「んだとお!!」

「っていつか、僕が子分って言うのは決定なんだね……」

今朝の夢を熱く語る馬鹿リックに、ため息を吐く。

相変わらず朝アサごはんの用意やら何やらまで一人でこなす僕は、朝っぱらから喧々ケンケン囂々セウセウとしているシルヴィアとリックを横目に鍋をまぜた。

昨日襲ってきた連中は、埋めた。地下深くに。だからパーティーメンバーにはバレていないはずだ。

というか、あれだけ怒声が響き渡っていたのに誰も起きてこないとか……緊張感が無さすぎではないだろうか。

「ちょっとリッ！なんとか言っちゃってよー！ー！」

「おいリッ！言い返してやれー！ー！」

はい、巻き込まれましたー。(2回目)

「ふう……どうでもいいけど、もうすぐ「飯できるから。食器の準備してくれない？」

「「はい」」

まあ、なんだかんだ言っちゃわれたことはやるので、可愛いもんである。手間のかかる弟妹を持った感じだ。

……リッキーは見たところ僕より1つ2つ年上なんだけど……まあいいか。

「あわわ、皆さんっ」

「あれ、おはよーマーカスさん。どったの？」

慌てて出てきたマーカスさんは顔面蒼白で、いつこうにテントから出てこないガラム爺さんの存在がみんなに嫌な予感を抱かせた。

ま、まさか……。

「皆さんと共に護衛任務に当たっていた熟練魔導師のガラムさんですが……朝起きたら眠るよつに亡くなっていました」

で、デジャブ……っ!!

積荷の冷却を終えたリッキーが、馬車の幌からフラフラと出てきた。

2時間ほど常に冷気を作り出していたリッキーは、もう魔力も体

カモバテバテのようである。

だが、これだけ長い時間冷やしたのなら、しばらくは保つだろう。頑張ったようなので、水を用意してやる。

「うへー、しんどっ」

「お疲れリツキー。ほら、水」

「おう、さんきゅーリツ！」

「ふん、たったそれだけでバテるなんて、軟弱ねえ」

「なんd「シルヴィア、それは聞き捨てならないな」」

シルヴィアのいつもの軽口に乗っかかりかけたリツキーだが、この発言はいただけない。何かいいかけたリツキーにかぶせて、僕はシルヴィアに眼を向けた。

「魔力の保有量は、生まれたときから決まっている。それは知っているよね？」

「え、あ、うん……」

「なら、本人の努力じゃ魔力量だけではどうにもならないんだ。それを馬鹿にするって言うのは、いけないことじゃない？それに、エルフはともかく人間は、魔力を失えば死んでしまうんだよ？」

「う……ごめんなさい……」

「へへっ、ざまー」リックィ。魔力の絶対量だけは努力じゃ増えな
いけど、術式を弄れば消費量を抑えることはできるよね？……う
っ」

なんとなく萎んでしまった2人に背を向け、幌の入り口を開く。
心地よい冷気が隙間から漏れ出て、僕の前髪を揺らした。

「僕の師匠の言葉だけどね、『生まれ方は関係ない。その後どうい
う生き方をするかが重要』だそうだよ。偶然持って生まれた大魔力
に胡坐をかいたり、努力は報われないと卑屈になったりするの
は、
誇れる生き方なのかな？」

「……」

「ん……次は僕の番だから。2人は魔力の回復をしろってね」

パタンと幌を閉じて、ふう、と一息。

「……………っ！……………っ！」

そしてジタバタと悶えた。それはもう悶えに悶えた。なにを僕は語っているのだろうか。

誇れる生き方なのかな？（キリッ

死ねる。これは死ねる。

「はー、ミュールには見せられないな」

いや、聞かせられないな、か。それにしても偉そうに説教とか、恥ずかしすぎる。

ミュールに聞かれたら、絶対に「お前が言うなww」って言われる。下手したら広域殲滅魔法まで使われるかもしれない。

さっきの2人に言った言葉……全部ミュールから僕が言われた言葉だったりする。

「……はあ。やるか」

薄い青が手のひらから漏れ出し、大気の熱を冷気に変換していく。

術式を弄りながら、もっとも変換効率のいい組み合わせを模索する。

結局、次の野営が決まるまで、僕は冷気を出し続けた。幌から出て、ピンピンしている僕を見たみんなの表情は、なかなか傑作だった。

既視感って結構頻繁に起こるよね？（後書き）

今回も不幸度は低め。

でも次回は散々なことになりそう。

ちなみに実力バレは、次回に持ち越されました。

今のパーティーメンバーの誰かは、レギュラーになりそうなんです。

では最後に、逝ってしまったガラム爺さんに、黙祷つ。

油断大敵ってのはこのことか（前書き）

リツの不幸度が凄いことに。詳しくはあとがきのリツをご覧ください
それと、わずかですが感想を参考に書き直してみました。改良にな
っていたら幸いです。

油断大敵ってのはこのことか

二日目の野営もつつがなく終了し、残りの道を歩く僕ら。日が暮れる頃には、目的の港町アーセナルに到着するようだ。

それにしても、ここらへんも平和になったものだ。僕らがこの大陸に初めて降り立ったときなんか、殺る気マンマンの上級悪魔に大型竜種、ウィンウィンと不吉な音を撒き散らす古代の機神兵に、暴走した上級精霊と、なんのお祭りですかっという状況だったし。

五歩歩けば魔物は襲い掛かってくるし、魔力欠乏なんて当たり前、下手すれば魔物の群れの中で気絶なんてのもあり得たかもしれない。

「うふふ、平和だ……うふふふ」

「リツが……リツが不気味だ！」

「こらっ、そういうこと本人の前で言わないの！」

おいキミら。聞こえてるぞ。

いや、だがそれにしてもいいことだ。道の脇に咲き誇る、美しくも彩り鮮やかな花々。太陽の光に輝く赤や青、黄に眼をうつしながら、のんびりと街道を歩く。うん、穏やかだなあ。

ちなみに幌の中は、僕が積荷以外のほぼ全てを完全凍結したため、しばらくはこのままのんびりできる。おそらく目的地につくまで、このままでもいいだろう。

最初からやれって?……べ、別に思いつかなかったわけじゃないんだからねっ!

「あともう少しで港町アーセナルですよ!」

「わあっ! やつと綺麗なお風呂に入れるんですね!」

御者台から顔を出したマーカスさんの言葉に、いち早く反応したシルヴィア。やっぱり女の子、そう言うことにも気を使うお年頃なんだろうね。

対して、ちよつと不服そうなりッキー。多分、今回の道程で活躍の場がなくて、面白くないんだと思う。

「ちつくしよ〜! 強敵出て来いやあああ!」

なんて叫んでいた彼に、そんなことを言うとホントに寄って来るから止めてくれと、割と本気で懇願した僕。

この世界でフラグは無視できない要素だ。以前僕も、それで酷い目にあっただことがあるから分かる。

女の子を助けて（下心あり）暴力団ぽい奴らの抗争に巻き込まれたり、女の子を助けて（下心あり）騎士団に連行されかけたり、女の子……かと思ったら男の娘を助けて（下心あり……でした）多くの女の子に命を狙われたり！あれ！？

これ……全部僕のスケベ心が原因なんじゃないか？

「おや、なんだか雲行きが……ぬうつ！？」

「あ、きゃあつー！！」

「ちっ、なんだってんだ！！」

ブツブツと気づいてしまった重大な事実を心の奥底に追いやるの
で必死だった僕は、注意力が散漫に過ぎていた。突如として全体に
広がった黒い影の存在に、気がつかなかったのだ。

パツと顔を上げて目に映るのは、迫り来る真紅の巨大な……壁？

「リッさん、危ない！」

「リッ!」

「お願い逃げて、リッ!」

「……………ん?」

「一体何が起こっていら(ぐ)しゃあ」

S i d e シルヴィア

「り、リッ……ッ!」

そう、それは突然だった。赤い赤い、竜の尻尾がリッを遙か遠くへ弾き飛ばしたのだ。これでは、当然生きていないだろう。下手し

たら、原型すら留めてないかもしれない。

直後、そいつは私たちの前に姿を現した。ドスン、という地響きと共に、地面に降り立ったのは竜種の中でも中級に位置する炎竜。ファイアドラゴンだ。

全身が血で染まったような暗い赤色で、その体表は触れたもの全てを傷つけるかのごとく鋭いところで覆われている。

馬車なんかよりも遙かに大きな凶体は、真正面に立ちすくむ私たちをコレでもかと威圧する。正直、私はもう立っていることすら困難な状況だ。足が震えて、何がとは言われないがちびりそうだ。

「ほおおおおおおりゃっ!」

と、私が呆けている間に誰かが奇妙な奇声と共に炎竜に突進していく。手には槍とそろばんが合体したもの。リツが「正義のそろおん!」ト○ネコかよっ!」といていた武器だ。走る体にあわせ、ブルンブルンと贅肉が揺れる。

って、護衛対象のマークスさんですか!?

慌てて隣を歩いていた馬鹿を振り返ると、白目を剥いて気絶しているリツキーの姿が。

「も、もう……やるしかないじゃないっ!!!」

ホントは泣きたい、恐怖に震えたい。だけど、そうこうしている
と依頼主のマーカスさんが死んでしまう。

「ほりゃほりゃほりゃほりゃほりゃあああああ!!!」

……いや、なんだか大丈夫そうだね。でもなんで突然あんなにア
ツパー気味に？

考えていても仕方ない。今は奇襲を受けて戦闘不能のリツも、中
てられて涎垂らしてるリツキーも、今は意識から除外。

倒せなくても、なんとか生き残るっ!

「い、いくわよ……『アイシクルボルト』!」

「ふぎゃあああああ!!!」

「マーカスさん魔法の射線に入ってこないでよ!」

『ギヤアアアアアス!!』

「ひいつ!!」

氷の結晶を多分に含んだいかずちは、炎竜目掛けて一直線に飛んでいったが、いきなり斜線上に飛びだして来たマークスさんによって遮られた。

確かに直撃コースだったところをマークスさんに邪魔されたのだ。護衛対象とはいえ、殺意が芽生えそうです。

直後に怒った炎竜の咆哮。圧倒的な大音量に、思わず耳を抑えてしまった。その致命的な隙に、炎竜は鋭利な刃物を思わせる爪を振り下ろす。

マークスさんのすぐ前に振り下ろされ、直撃は避けたが衝撃で馬車ごと横転するマークスさん。圧倒的威力に、耐えられず気絶したらしい。

「くっ……『アイシクルダガー』!」

苦し紛れに打ち出した氷の刃も、炎竜の体表で溶けてしまう。何度と無く氷属性の魔法を打ち出すが、全て体表で溶かされる。そうこうしているうちに炎竜はすでに目の前に。私は、絶望感に襲われ

た。

竜種はたとえ下級であっても、熟練の冒険者何十人と集めてやつと倒せるほど強力だと聞いていた。中級となったら、個人で英雄並みの力を持つものがパーティを組んで倒すものだ。でも、実際に見るのは初めてだった私は、竜種の強さにいまいち実感が沸かなかった。

でも、今なら言える。あの時、敵が竜種だと気づいたときにすぐ逃げるべきだったんだ。私は自分の実力にながら自信を持っていたが、それが驕りだったことを悟る。

「やだ……来ないで……」

『ギヤアアアア！！』

「助けて、誰か助けてえええ！！」

私の絶叫と同時に、爪を振り下ろす炎竜。それを見て、ギョッと目を瞑った瞬間、その声は聞こえてきた。

「『レイ』」

低音だが、男にしては少し高い少年の聲が、はっきりと私の耳に届く。

次の瞬間、『ズガガガガッ！』という凄まじい轟音と共に閉じた目蓋の先が真っ白に染まった。

慌てて目を開くと、絶叫してよろける炎竜と、なおも落ち続ける光線が目に入った。その光線は、炎竜の爪を折り、翼を焼き、牙に穴を空ける。

今の魔法は……レイ？光属性中級魔法だけど、こんなに威力が高かったかな？

と、それより今の声は……！

「……り、リツ！？」

「やあ、シルヴィア。無事……とは言えないまでもなんとか間に合ったか」

「……いや、逆にあんたが大丈夫か聞きたいわ」

背後から現れたリツは、頭からド派手に血を流しており、血濡れの部分が無い状況だ。助けしてくれたのは嬉しいけど、正直さつさと治療院に行ったほうがいいんじゃないかと思うほど。

というか、なぜ顔面をヒクつかせて、炎竜を苦々しい顔で見ているんだろう？

でもまあ、リツが来てくれたのは嬉しい。彼の实力は、私やリツキーよりも上だろうし、炎竜から逃げるなんて造作もないことだろう。なんとか足止めをして、その間にリツにマークスさんを連れて行ってもらえば、少なくとも依頼の失敗にはならないはずだ。後は国の騎士団などに、討伐されるのを祈ろう。

「リツ、今から私が時間を稼ぐから、マークスさんを連れて……」

「いやいや、時間稼ぎとかいらさないよ」

「え？で、でも依頼が……」

困惑した私の言葉には答えず、そのまま歩を進めるリツ。私よりも前にでた瞬間、リツからどす黒い殺気のようなものが溢れ出てきた。

それを見た私を感じたのは、純粹な恐怖。漠然とだが、これからリツによる蹂躪が始まるのだと思わせる。それほどの威力を持つ殺気だった。

私が向けられているわけでもないのに、足がガクガクと震える。そして、混乱して恐慌を起こした私の耳に届いたリツの声は、怒気

を孕んだ刃のようにこの場を切り裂いた。

「トカゲ野郎の分際で僕に奇襲とは、調子こくな……！」「シルヴァ
リオン」！！」

『ぐ、ぐが……』

リツが腰に差していた長剣（あれ、あんなの持ってたの？）を抜きながら叫ぶと、その剣は呼応するように蒼く光る。その光に、炎竜は気圧されたのか唸るだけだ。

「『サンダーストーム』『ダイヤモンドダスト』『イビルシザーズ』

剣を片手に走るリツは、立て続けに大呪文を詠唱していく。その先に待つ炎竜は、特大の雷の嵐に飲み込まれ、降り注ぐ大粒の氷の結晶に切り裂かれ、闇の瘴気が形作る爪にえぐられ、すでに満身創痕だ。

リツが連発する大呪文は、どれももはや広域殲滅魔法なんじゃないかってくらいに威力が高い。こんな魔力の運用は見たことが無い。これはもう、別の魔法なんじゃないの……？私が驚くのは当たり前

だけど、なんでリツ本人がひいてるのよ。

頭を振って何かを振り切ったリツは、その炎竜に向かい、剣を持つていないほうの手で剣の腹をなぞる。途端、古代文字のような文様が、なぞった部分からすべるように現れた。

ひたすらに蒼く、発光する長剣。ことここに至って、ようやくリツの持つあの剣が、魔剣であることに気がついた。内包する魔力は、肌で感じるほど膨大だ。脳裏に、先ほど考えていた英雄の姿と、リツの姿がダブる。

けれど、唐突に炎竜の胸が膨らんでいく。リツを正面に見据えた炎竜は、口を大きく開けて……！

「リツッ！！」

『ゴアアアアアツ！！』

炎の奔流を吐き出した。炎竜のブレスだ。コレには一個師団は全滅するほどの威力が秘められている。ましてや中級竜種のブレス、骨すら残らないだろう。

私は力を失って、へたり込んだ。短い間ではあったけど、一緒に旅してきたリツが。やわらかく、されど厳しく諭してくれたリツが。私が絶体絶命だと思って諦めたとき、助けてくれたリツが。炎竜に敗れたんだ。

しばらく呆然としていた私の耳に、「ガッ」という地を踏みしめる音が聞こえた。もしかやもう炎竜が!? そう思って目を向けると、そこには信じられない光景が広がっていた。

すすけてはいるけれど、しっかりと足を踏みしめて走るリツの姿。あまりの速さに、剣の蒼い光が残像を残している。驚いた炎竜に向かって、ただただ進むリツ。驚きのあまり、私はへたり込んだ状態から飛び起きてしまった。

「おおおおおお!!」

走り寄ったそのままの勢いで、咆哮と共にリツは長剣を突き出す。先ほどのブレスが最後の力だったのだろう。すでに多くのダメージを受けて避けることも出来なかった炎竜の腹に、深々と突き刺さった。そして、突き刺さった部分から古代文字が流れ出し、炎竜の体を包み込んだと思うと……。

「…………爆ぜる!」

大爆発を起こした。驚きを通り越して、呆れすら感じる。一瞬、リツも爆発に巻き込まれたんじゃないかと思ったけど、すぐに横に

気配を感じたため、安堵の息を漏らした。

さっきのリツは怖かったけど、今はもう怖くない。というか、戦うリツがちょっとカッコよくなって、何考えてるの私は!?

……それにしても、よかった。私、死なずに済んだんだ。安心して、腰が抜けてしまい、その場で尻餅をつく……ことはなかった。リツが、よろけたときに支えてくれたのだ。それに少し気恥ずかしくなりながら、体を強張らせていた力を抜く。赤くなった頬を、見られないといいけど。

「おっと、大丈夫？ 大きな怪我とかは無いいみただけど、一応ね」

「あ、治癒、術……？ 何で魔導師のあんたが法術なんか……それに、剣……？」

「昔の仲間だね、教えてもらったんだ」

ほんとに、コイツ何者？ 見たこと無いほどの威力の大呪文、蒼く光る魔剣、治癒術。10代の若者に……というか、私より若いのに修められるものじゃない。

どんな過酷な修行をすれば、こんなに強くなるんだろう。そう疑問に思いながら、心地よい暖かさに身を任せ、私の意識は深いまどろみへと落ちていった。リツが何かを慌てて言っていたけど、眠りについた私には、届かなかった。

油断大敵ってのはこのことか（後書き）

S i d e リ ッ

「お願いだから今回見たことは誰にも……って、寝てるのかよ!？」

腕の中で眠る少女は、僕の外套の裾を握ったまま眠りについた。大きな怪我を負った人はいないようで、僕は安堵のため息を吐く。

中級の炎竜とはいえ、油断してたから結構痛かった。ただ、全身血濡れとはいえ、怪我自体はそう酷いものでもない。派手に血の出る額を切ったから、酷く見えるだけのことだ。

ってというか、気配とか分かんないし!そんなのアニメや漫画や小説の世界だけだったの!という自己弁護を試してみる。

ふと、殺した炎竜の死体に目をやる。所々が炭化し、崩れかけたその悲惨な姿は、僕に「やつちまった」と思わせる。正直言って、魔法剣まで使うことはなかった。意味わかんないほど一つ一つの魔法の威力が上がってたし。

ちょっと、怪我させられてキレてたっていうのもあるけれど。中級程度の竜種なら、魔法か剣だけで勝てたのに、なんで実力がバレる危険を冒してまでこんなことを？

「……シルヴィアが、ミュールにちょっと似てたから、かな」

どこというわけではないが、雰囲気はなんだか似ている気がする。
うん。

多分、そのシルヴィアの危機に、自分でも驚くほどプツン来たの
だろう。自制しないと。

「……って、ああああ!？」

ふと、胸元が冷たく感じ、まさぐってみると、かなり高価な魔法薬
のビンが割れ、中身が漏れまくっていた。なんてこつたい。

しかも、なんだこの感触……!?!あ、ああああ!!

ミュールから魔王城突入前夜にもらった、ペンダントが!ひしゃげ
てる……!

ややややばばbbbbrry

ミュールに見つかったら、こ、殺される……!

「ううん……」

戦慄を隠せないでいると、腕の中のシルヴィアがもぞりと動いた。
なにかブツブツ言っている。寝言……？

「リッ……」

「ぼ、僕……？」

「リ、ッ……年下の癖に生意気よ……」

「なっ……!!」

い、いや、確かに僕は童顔かも知れないけれど！

でもキミ、17か18だったよね!?

僕は、20だからあああああっ!!

見た目で判断するな……足元揃われるぜ？（前書き）

次話へのつながりな話なので、ちょっと短めです；
でも、この物語の根幹に触れてくる部分でもある……ような気がし
ないでもないような。

見た目で判断するな……足元拗られるぜ？

「照りつける太陽……輝く白い砂浜……キャツキャウフフの水着美女！やってきました、港町アーセナル！！」

「実際はどんより曇り空にオキアミの腐った匂い、おまけにミャーミャー煩いウミネコだけどね」

「なんつでだよ！！太陽は！？砂浜は！？俺を待ち受ける美女hっふっ」

「うっさいわよ馬鹿^{リック}」

ついにやってきた港町アーセナル。けどそこは、予想よりも遙かにしけた町だった。

規模で言うとなかなか大きな町だろう。前の時代にはなかった、石製の民家も出来ている。魔王討伐時代（便宜上こう呼称することにした）は、城とか以外は全部木製だったからね。

一本の大通りを中心に、店屋が連なり、そこから外へ向かうにつれて民家が多くなっていつている。かつては栄えたんだろうと、思わせる造りだ。

現在は通行人すらもまばらで、時々店先の掃除でもしているのだろう店員が姿を現すくらいである。見ていてなんだか、生まれ育った世界のシャッター商店街を連想させた。

海風に乗って漁港特有の腐臭がして、思わず顔をしかめる一同。
そんな中、馬車の御者をしていたマーカスさんが、陽気に片手を挙げて言い放った。

「やや、ありがとうございます皆さん！おかげで無事にたどりつくことができましたよ！報酬のほうは、ギルドに渡しておきますからね！」

「いやあ、竜種に出くわした時はどうしたもんかと思ったが、運よくドラゴンキラーが通りすがってくれて助かったな！ま、俺様が本気出せばあんな奴簡単に（ry）」

「……………ッ！」

「そうです！私たちを助けてくれた旅のドラゴンキラーさんたちにもお礼をしなくてはなりませんね！シルヴィアさん、本当に彼らの顔を見なかったのですか？」

「み、見てないですね……………」

「残念ですなあ。ではでは、私は商業ギルドに品物を納品しなければならぬので、失礼しますよ」

がっはっは、と豪快に出っ張った腹を揺らし、去っていく依頼人。その後姿を見送って、隣のシルヴィアと一緒に安堵のため息を漏ら

した。

そう。前回の暴れだが、気絶から立ち直ったシルヴィアに口止めする際、竜の亡骸である黒こげのナニカをどういいわけするのか、ということになった。

あーだこーだ言っつて、結局旅のドラゴンキラーが退治してくれた、ということになったのだ。

ドラゴンキラーとは、この世界に昔からある、竜種退治を生業とした集団の総称のことだ。大体7〜8人の団体で、彼らをドラゴンキラーの一チームと数える。

僕らも魔王討伐時代、たったの5人で最上級竜種『エンシエントドラゴン』の番を討伐したため、最強のドラゴンキラーとして認められていた。まあ、あのときはかなりギリギリだったけどね。そして僕らのチームにチーム名が……いや、ライトの残念なネーミングセンスの記憶だし、これも後々思い出すでしょう。

とにかく僕とシルヴィアの口裏を合わせた嘘に気づくことなく、リッキーとマーカスさんは旅を再開してくれた。ホントにバレルかどうかドキドキだったよ。目立ちたくないでござる！

「でもよう、なんだか思ってたところと違うなあ。祭りがあるって話だったが、まるで活気がねえじゃんか」

「あ、リッキーも知ってたんだ、お祭りの話。土地神降臨とか胡散臭いことこの上ないことを謡い文句にしてるあたり、興味をひかれ

るよねー」

「……………？えっと、リツ？『神』が降臨するのなんて、そんなに珍しくないことじゃないかな……………？」

「……………？？」

え？いやいや、ちよつと待って。神が降臨するのが、『そんなに珍しいことじゃない』！？

シルヴィアの言葉を理解するのに、少し時間を要した。どういうことなのか、さっぱりだ。

僕の訝しげな顔に疑問を持ったのか、さらに困惑の色を強くしてシルヴィアは説明する。

「え、えつとね。今から約800年前、魔王城のあつた辺りに始まりの神『エリクシル』が降臨したの。荒廃した世界に救いをもたらすとかで。それで、それ以降各地で神の降臨が繰り返され、今の緑豊かな世界になったのよ」

「ってか、今の子供だつて知ってる歴史だぜ？リツ、お前どんだけ田舎に住んでたんだよ」

「あ、あはははは……………山奥に1人で住んでたから、常識には疎いんだ……………」

「……………」

「うっ」

なんだか2人からの視線が妙に優しい…………っ！

その優しさがつらいんだよ…………っ！

「ご、ゴホン……………この土地神は割と有名で、青の神族『アーセナル』ね。町の名前は、この土地神の名前から取っているのよ」

「んで、年に一回のここの祭りってったら有名なんだが、実際に来てみるとなんだか寂れてやがるってわけだ。祭りがあるんだから、もっと活気のある町だと思ってたんだがなあ」

「ふうん。ありがと2人とも、説明助かったよ」

「兄貴に」「お姉ちゃんに」

「任せなさい」「」

そんなに僕は童顔ですかチクショーツ！！

とりあえず、3人一緒に冒険者ギルドへと足を運ぶ。報酬をもらうためだ。

受付にいるゴツイ筋肉隆々のお姉さん（！？）に、依頼達成の報告をする。

「はい、伺っております。依頼主はマーカス様でございますね？こちらが報酬の、50ペヘモス銀貨です」

「あ、ありがとうございます……」

「ランクは変わらずEでございますね。より一層のご健勝を心よりお待ちしております」

「ビ、ビ、ビ……」

見た目からは全く想像のつかない丁寧な対応に、とても戸惑ってしまった僕がいた。

だって、声なんか鈴を転がしたような綺麗な声なんだよ!? 外見は「ぶるうあああああ!」とか「ぶく〇くうん」とか言いそ
うな顔なのに!

予想外にもほどが「おるうあああああ!」……え?

「ぎゃあああ!」

「死いね死ね死ね死ね死ね死ね死ねえええええええ!」

勇ましい声の発生源に恐る恐る目を向けると、そこには……。

一見かわいらしい小柄な受付の女性が、般若の形相で茶髪を振り
乱し、リッキーのマウントポジションを取ってタコ殴りにしていた。

「だあれが彼氏も居そうにない生涯独身ペチャパイ男女だってえ!
? あたしだって好きでこんな体に生まれたんじゃないわあああ
!」

「ぎゃああっへぶっ! 助けぐへっ! り、リッごばっ!」

「てめえもコイツの仲間かああああ!!」

「うわっ、こっち来た!!」

「待あてゴリアアアアアア!!」

「何で僕まで巻き込まれてんのさああああ!!?」

かわいらしい声で丁寧な対応のマツチヨ女(?)と、かわいらしい容姿で暴力の嵐なヤンキー女(?)。

「このギルド支部、どうなってんロ」(グシャアッ

ポーン。

リツさんがログアウトしました。

見た目で判断するな……足元掬われるぜ？（後書き）

いよいよ規模が大きくなってきました。

神（笑）

作者の厨二も天元突破のようです。

さてさて、風呂敷を広げまくりましたが、なんだか畳める気がしないぞ、これ；

まあ、大体の構想は練ってるし、大丈夫……だよな？

天井は二回までなんだよっ！（前書き）

今回も話進みません。

ただ、『彼女』を出しておきたかっただけです。

話の展開を求める方は、どうかしばしの我慢をお願いしますw

天井は二回までなんだよっ！

「…………ふむ」

祭りを明日に控えた今日。僕は宿の洗面台で、顔面の薄れてきた痣を気にしていた。

そう。先日リックキーのとばっちりで、タコ殴りにされたときの痣だ。

あのヤンキー風な受付をナンパしたリックキーは、辛辣な言葉で断られた拳句、罵られたらしい。その言葉にプツンした沸点の低いリックキーは、売り言葉に買い言葉。あの子をナイチチだの絶壁だの男女だのと罵った。そしてあの騒動だ。

……………これ、もしかしなくても全部リックキーが悪いよね？やっちゃんっていいかな、あの馬鹿。

はふう、とため息をついたと同時に、勢いよく部屋の扉が開いた。飛び込んできたのは、言わずと知れた馬鹿。僕と違って治癒の術を持っていないリックキーは、まだ顔面が青く腫れている。

「っよーっリッ！町に繰り出して女引っ掛けようぜいー！！」

「うるさいよ馬鹿^{リックキー}。そもそもそんなパンパンの大福面でどんな女の

子引つ掛けるのさ馬鹿。もつと考えてからモノいいなよ馬鹿。それともう2度と僕を巻き込まないでよ馬鹿」

「馬鹿馬鹿言うな馬鹿！馬鹿って言ったらお前が馬鹿なんだぞっ！」

「はい、キミの方が僕より多く言ったから、キミの方が馬鹿だね」

「あっ！ホントだ、俺様ってば馬鹿！？」

リッキーを馬鹿にしまくることで、なんとか溜飲を下げることが出来た。

今日はちょうど、ギルドに行こうと思っていたんだ。依頼を請けるにしろ請けないにしろ、情報が集まるのはやっぱりああいう人が多く集まる組織だろう。

魔王討伐時代は、酒場がメインだったからなあ。あそこだと手に入る情報がまばらで、不便だったんだよねえ。時代の移り変わりに感謝だ。

「馬鹿！？俺様って馬鹿なの！？」と煩いリッキーはほっついて、部屋を出る。石造りだからか、少しひんやりとした宿のロビーは、眠気を程よく覚ましてくれた。装飾もなく、花が申し訳程度に活ける質素な感じの宿で、なかなか気に入った。城とかに泊まったこともあるけど、やっぱりこういふ庶民的なほうが落ち着く。

「あ、リッ。起きたのね？おはよう」

「ああ、シルヴィア。おはよう」

「だいぶ痣も薄れてきたわね。さすが、法術使えるだけあるわ」

「かじった程度だけど、ないよりはマシだよ」

ホントは、上級法術まで使えるけど、それは黙っといたほうがいいよね。

それでも魔法術士として頂点に登りつめたウエンディから手ほどきを受けていたんだ。並大抵の実力ではないつもり。

僕は勇者パーティの全てを受け継いだと言っても過言じゃない。ライトからは剣術を、ウエンディからは法術を、ミユールからは魔術を、バーンからは格闘術を。だれか1人が戦闘不能になった場合に、その役割を担えるように、みんなから手ほどきを受けた。

よく言えば多芸、悪く言えば器用貧乏。結局、それぞれ彼らには敵わなかったからね。だけど、戦闘ではオールマイティに動くことを心がけて、全体のサポートをしていた。

つとど、思い出に浸っている場合じゃないな。

「これから、僕はギルドに行くつもりなんだよ。シルヴィアはどうするの?」

「私もギルドね。学院に、手紙を出さなきゃいけないもの」

「そっか、学生だったね。今回の依頼は課題か何かだったの?」

「うん、長期休暇における課題よ。もともと、私はクラウリアの町出身なのよ」

クラウリア……あの厨二満載の石碑がある町か。

あんな恥ずかしい2つ名つけやがったド畜生は、殺して解して並べて揃えて……って、このネタもこっちの世界だとネタにとられな
いから困るなあ。

「なにか1つ、ランク相当の依頼をこなすこと。これが課題だったわ」

「それで、あの依頼を請けたんだね。ん?ってことは、シルヴィアはDランクなんだ」

「うん。そういえばリツは?あれだけ強いなら軽くAとか……」

「んや、Eだよ」

「へえ、E……E!？」

み、耳が……。そんなに驚くことかな？

「なんで!？なんでそんな低いランクなの!？」

「い、いや、この前ギルド加入したばかりだから。今回が初の依頼だったんだよ」

「ギルドにその歳で初加入……。あ、でも山奥でずっと暮らしてたなら、仕方ないのかな……?」

「まあ、そんな感じだよ」

そう締めくくると、何かを考え込むような仕草をするシルヴィア。

ギルドに加入するのって、普通は12、13歳あたりらしいから、驚くのも無理ないかな。

ただ、僕くらいの年齢になって加入する人も、少ないけど居るらしいし、そこらへんギルド員さんたちは慣れてるよね。今のシルヴィアみたいな対応、されたことないし。

なんとなく納得していると、唐突に顔をあげて、ズイツと顔を近

づけてきたシルヴィア。反応が遅れて、自然と至近距離で見詰め合う。

だ、駄目だ……！僕には心に決めと「あのさ！」うん、そんなわけないね。超恥ずかしー。

「リツ、魔術学院に入学してみない!？」

「はあっ!？」

「だって、今まであまり人と接して来なかったんでしょ？魔術の腕は凄いかもしれないけど、学べばなにかつかめるかもしれないし」

「い、いや、でもねシルヴィア。さすがに年下の子たちと一緒に受けるのは……」

「年下って……リツって何歳なの?」

「今年で20かな」

一瞬、ポカンとした表情になるシルヴィア。徐々に信じられないという顔になっていき、わなわなと口元を震わせる。

……うん。なんとなく次の展開は読めてきた。ここは落ち着いて耳をふさいで、と。オツケー、準備できたよシルヴィア!!

「嘘でしょおおおおおおお！？」

宿屋中の人々が、一斉に飛び跳ねた。

ところ変わってギルド。あの後なんとかシルヴィアを落ち着かせて、ギルドへ移動した。その際、当たり前のようにリックイーがついてきているのは何でなんだろうね……？

あまりクラウリアと変わらない造りのギルドで、まわりの石造りの建物の中に紛れて、ここだけは木造だ。なにかこだわりでもあるのかもしれない。

ギルドに来るまでの町の様子だが、少しだけ人が集まってきたような気がする。やっぱり祭りのためにやってきたのかもしれないが、依然として町全体には辛気臭い雰囲気漂っていた。こんな沈んだ空気で、祭りなんかできるのかな？

「なあ、いつそ俺たちパーティ組まないか？」

「パーティ？」

「私たち3人で？全員魔術師なの？」

「おう。いつそ魔術師だけのパーティでも作っちゃまってよ！戦士職の奴ら、へこましてやらねえか！？」

「「却下」「

「えー」

何を言い出すかと思えば、案の定ろくでもないことだった。パーティというものは、バランスが鍵を握ってくる。後衛を守る戦士職、前衛のサポートをする法術士、そして溜めは長いが大火力の魔術師。これが基本的なパーティ編成だ。

基本は強い。この基本を逸脱しすぎた奇抜な編成は、意表は突けるかもしれないがそれだけだ。地盤がしっかりしていない以上、瓦解するのは目に見えている。

戦士職になんの恨みがあるのかは知らないけれど、リッキーの案は却下だ。

「結構イケると思ったのになぁ……リツは前衛もできるし」

「「ッ!？」」

「あれで隠してたつもりかよ。身のこなしとか、体捌きとか、明らかに前衛寄りじゃねえか」

ニヤリ、とニヒルに笑うリッキー。僕とシルヴィアは、知らず知らずのうちにゴクリと生唾を呑み込んだ。互いの顔を見合わせ、1つ頷く。

同じ感想を抱いたであろう僕らは、同じ言葉を口に出すべく、同時に言葉を紡いだ。

「「ポコポコの顔でドヤ顔とか、キモい……」「」

「知ってるよチクシヨオオオオオオ!!」

泣き叫びながらギルドを飛び出していくリックイーを見ながら思考する。

リックイーは、一見馬鹿だと思っていたけど、ただの馬鹿じゃなかった。少なくとも、ただの魔術師ではない。

おそらくは、前衛の訓練を受けたことのある、特殊な例の魔術師。

これからは認識を改めないといけない、とリッキーの評価を情報修正しながら、目の前の般若に目を向ける。

「まあたお前らか……扉、弁償してくれるんだろうなあ……？」

「もちろんさあ」

リッキーが飛び出していくときに、蹴り開けた扉は、壊れて使い物にならなくなっている。

シルヴィアは般若の顔を見た瞬間、僕を置いて逃げやがった。あのアマ。

そして目の前には、先日お世話になったタコ殴りのヤンキー娘。顔がテラ般若。

某ドナル〇の真似をしてしまったのは、精神的に追い詰められているからかな……？

「まあ、弁償は当然として。悪いことしたガキには、制裁が必要だよな？」

「ななななな、何をおっしゃるウサギさん!？」

「なっ……て、てめえなんであたしの名前をつ!？」

「マジで!？」

「恥ずかしいからその名で呼ぶんじゃねえ!！」

「じぶぶっ」

うん、また前回と同じ展開。そのままフルボッコされて、ギルドの外にペイツと出されました。

情報収集に行ったのに、得られた情報はヤンキー娘の名前がウサギちゃん(笑)だということだけ。

とりあえず……リッキー殺す。

天井は二回までなんだよっ！（後書き）

やっぱり、割を食うのはいつもリツですw
ウサギちゃんです。クラスは格闘家。

勘のいい人なら、この後の展開が読めてきそつで怖いですねw
次回、ついに神降臨。その神を見たリツは……！？

顕現する神と一時の別れ（前書き）

ウサギちゃんのターン!!

顕現する神と一時の別れ

時を越えて、この時代の人々と接するうちに思い至ったのは、全てが『弱い』ということだった。

腕自慢で方々に幅をきかせている町の荒くれ者たちも、名を上げて有名になったギルドの実力者も。ともすれば不意打ちは食らったものの、シルヴィアの手前かなり加減して（それでもなぜかかなり威力が上がっていたが）戦ったあの竜種も。

どれも本当に跡形も残らないほど滅ぼそうとすれば、1分もかからないだろうことは確信した。

だけど、この目の前の『モノ』は。

悠然と佇み、戦神のごとく威圧感を発する人ならざるモノは。

初めて相対したときの魔王を、彷彿とさせる。

僕1人では……勝てるビジョンが見えない。

「これは……ヤバイでしょ」

『汝、この時代の住人ではないな？何ゆえ、存在している』

「さあ、そればかりは僕にも分からない……かな」

目の前に佇む人ならざるモノ……青の神族『アーセナル』は、僕のことを知っているようだ。

この町の名を冠す神は、僕の顔を覗き込む。青い瞳の奥に、かすかに感じる見覚えのある魔力。暗く深く、闇のような魔力だ。

確信した。コイツは……魔王の欠片だ。『神』だなんて人々を騙しているが、魔王本人と相対した僕には分かる。忘れようもない、底冷えするような冷たい魔力の持ち主は、間違いなく魔王。

恐らくあのとき、死の間際に砕け散った魔王の魂は、方々に散らばり眠りについたのだろう。そして二百年のときが経ち、目を覚ました欠片は神を名乗り、実質的にこの世界を手に入れた……ってところか。

「さて……いよいよマズイね。今度の敵は、世界ですか」

相手に気取られないように、ひっそりとため息をつく。今度は周りに目を向けてみて、やらなければよかったと後悔。

自称『神』を名乗るこいつを見る祭りの参加者たちは、すっかりこいつを崇拜しきっているようだった。

神の降臨が始まる直前。僕とリッキー、シルヴィアは、数多く出された露店を巡っていた。シルヴィアは何かの果実を砂糖漬けにしたものを、リッキーは串に刺さった焼肉のようなものをそれぞれ頬張り、祭りを満喫しているようだ。

かく言う僕も、すっかり祭りの空気に中てられてか、すこし気分が高揚していたり。

不安に思っていた祭りの活気も、盛大とは言いがたいが、あの静かだった町のどこにこれほど多くの人々が住んでいたのかと疑問に思うほど賑わっている。

肉を焼くおっちゃんは声を張り上げて客を呼び込み、見世物として踊る妙齡の女性は腰をくねらせながら見物人に流し目を送る。ワイイガヤガヤとこった返す港町は、夜の闇に負けないほどの明るさを放っていた。

「この祭りに参加したのは初めてだけど、すごい活気ね！」

「だな！おほつ、あのねーちゃん色つぺえ……脱げ脱げーッ！！」

「あぁつ、ほらリックイー前ちゃんに見なきゃ。すみません、すみません」

アホなことを抜かすリックイーだが、今日は無礼講ということなのかシルヴィアは特に何も言わず、見世物に目を輝かせている。

となると、ふらふらしているリックイーのお目付け役となるのは必然的に僕だった。

ざつと見回したところ、服装も何もかも統一性がなく、色々な国から見物人がやってきているらしい。ただ、少し聖職者の姿が多く見受けられるようだ。

「ねえシルヴィア、神の降臨って、どんな意味があるの？」

「ん？んー、人々の信仰を絶やさないため、と言われているわ。人々が信仰を止めれば、神の力は劣っていく。それを防ぐため、神々は定期的に人々の前に姿を現し、簡単な奇跡でも起こして見せて、信仰を保っているらしいわね」

「なるほど、東方の諏訪大社の感じが」

「東方？」

「あ、いやいやこつちの話」

と、軽く雑談しながら3人でうろついていると、前にここ数日で見慣れた後姿が。ふつつつと湧き上がってくる復讐心。

思えば、ここで悪戯心を出したのが、運の尽きだったかもしれない。後になって後悔した。

僕はいきなり猛ダツシユ。驚く2人を置いて、今までセーブしていた力も全て解放。文字通りの全力で人の間をすり抜ける。

そして目標である、特徴的な茶髪の小柄な女性のスカートを、思いつきり捲り上げた。

「ほっ！ん？ほほうシマシマですか。ウサギちゃんも女の子らしい可愛い下着を」

「なっ、ななななっ！？」

「え、N a N a N a サマーガー○？」

「なばばば馬鹿野郎おおおおお！！」

「うはははっ！！」

「変態っ！スケベっ！女の敵っ！」

「がはっ、っほっ、げぶっ」

（10分後）

「……（虫の息）」

「はあ、はあ、はあ……」

……さて、みなさん。いきなりの暴挙に、何をしているんだこのキチガイは、と思ったことでしょうか。

返り討ち受けて撃沈だよ畜生っ！！

と、表面上泣きながら、手の中のものを確認する。

「……魔力触媒、か……」

「あ、あ！？」

「……（死んだフリ）」

ウサギちゃんの穿いているスカートの端に、クリップのようなものがついていたのだ。それこそが、この魔力触媒。基本的な使い道は、使用者の魔力を込め、その在り処を使用者に指し示すもの。重要な物品の紛失を防ぐため、使われていた。

しかし、明らかにこの魔力触媒は他所とつながっている。僕がいた時代ではあまりなかったけれど、発信機としても使えるから、人間に使って居場所を特定なんてこともできるんだよね。

後はこのままやり過ぎすだけだけど、当のウサギちゃんは周囲の目を確認した後、予想外にも僕にこっそりと耳打ちしてきた。

「……このサーチチャー、あたしは気付いてたんだぜ」

「……マジでか」

「何が目的かは知らないけど、おびき出して吐かせようと思ってたんだ。邪魔しやがって、こうなったらためえにも手伝ってもらっぞ」

「……了解」

本当に予想外だ。ウサギちゃんはなかなかキレ者だった。

あと、この時代ではサーチチャーなんて洒落た名前がついているのか。

一瞬何のことか分からなかったけど、魔力触媒のことだと話の流れから察した。

ウサギちゃんと助け起こされた僕は、人目を避けるように裏路地へその身を滑り込ませる。用心のために魔力を薄く放出して、追っ手がないことを確認すると、ウサギちゃんに目で大丈夫だとサインを出した。

「っはー。ホントどうなることかと思っただぜ」

「ごめん、ウサギちゃんが危険かと」

「馬鹿言ってんじゃねえよ。臨時でギルドの受付を依頼されて手伝ってるけど、あたしはランクBのベテランだぜ？」

「悪かったよ。ところで、これを仕掛けた犯人に心当たりは？」

「全くねえ……っつて言いたいところだが、そうとも言えねえな。おそらくは、この町の住人だろう」

町の住人……？ただの住人が、そこそこの冒険者であるウサギちゃんに気取られずに、仕掛けなんか施せるだろうか。

「住人？」

「多分、祭りに紛れてやられた。この町の住人、全員グルだろうからな。さすがのあたしでも、四六時中気を張ってるわけにはいかねえよ」

「全員……ッ!? ていうか、ウサギちゃんは何したのさ」

「何もしてねえよ。ただ、『神』への供物にしようって腹積もりだろう。この町ときたら、雰囲気から住民に至るまで、何もかもが薄気味わりいぜ」

「ってことは、その臨時の『依頼』も、畏の可能性は高いね。最初からこの町の住民たちは、ターゲットをウサギちゃん1人に絞つたのか」

そう考えると、さっきまで普通だと思っていた何もかもが不気味に感じるのだから不思議だ。

今思えば、祭りが始まる前の静けさと、始まった後の賑わいのギャップは不自然。よくよく思い出すと、住民たちの表情はいずれも作り物染みでいて、人間味があつたのはウサギちゃんだけだった気がする。

「つと、今ここであたしからサーチャーが離れるのはマズイから、てめえには来てもらったわけだ。下手すると、てめえの仲間も危ないからな」

「この町に居る以上、リッキーとシルヴィアは人質……か」

「そういうことだ。あと少しで『神』の降臨が始まる。そろそろ連中がアクシヨン起こしてくるだろうが……っと、言ってる間においてなすつたぜ」

ウサギちゃんが目をやるほうに体ごと向けると、路地の奥から、受付である丁寧な対応してくれた屈強な女性を先頭に、数人の男が現れる。

全員が全員能面のような無表情で、感情が抜け落ちた人形のようにだ。

少し目を凝らすと、魔力の糸が、目の前の人々の頭から伸びているのが見えた。

「抵抗は無駄です。神の儀式がもうじき開始しますので、速やかに連行させていただきます」

「ウサギちゃん、この人たち操られてるよ」

「まともじゃないことくらい、見りゃわかるぜ。さて、どうするかね……」

「抵抗は無駄です。神の儀式がもうじき開始しますので、速やかに

連行させていただきます」

「うげ、これは無限ループの予感」

無表情で同じ言葉を繰り返す屈強な男性たちと、より屈強な女性。これに勝るホラーは、たぶんない。ちよっとちびったかも。

「仕方ねえ。おい、ヘタレド変態」

「ヘタっ……！？てかド変態！？」

「わざわざめくる必要のなかったスカートめくっただろ。十分ド変態だ」

「……っ！（言い返せない）」

「まあ、そのことは後でたっぷり制裁を加えるとして……あたしはわざとつかまるから、てめえはさっさと仲間の安全を確保してこい」

「そ、それは！」

「見捨てるなんて言ってねえよ！あたしが儀式でやられる前に、なんとか助けるよな」

「……分かった、必ず！」

これ以上、時間を無駄に出来ない。これは僕のミスだ。

一刻も早く、リッキーとシルヴィアを確保して、ウサギちゃんを助けなければ。

もう、目立ちたくないとか言ってる場合じゃない、よな……。

ウサギちゃんに一礼した後、僕は砲弾のように裏路地を飛び出した。

程なくして、リッキーとシルヴィアは見つかった。想定していた限り、限りなく最悪に近い状況で、だが。

「あ、リッ！どうなってんだよコレ！意味分かんねえ！！」

「いきなり町の人たちに拘束されて、何が起こってるの……？」

「無実です〜！！助けてくださ〜い！！私はただの商人なんです〜！！！」

駆けつけた僕を待っていたのは、手首に手錠をはめられた、リッキー、シルヴィア、そしてこの町で別れたマークスさんだった。

彼らの周りには、不気味な静けさを保った住民たち。よく見れば、さつきまで屋台を広げていたおっちゃんも、踊り子をしていたお姉さんも、みんながみんな能面のような無表情をしている。手にはそれぞれ、包丁や農具などで武装しており、農民一揆でも起こしそうな出で立ちと言えるだろう。

おそらく、この人たちはみんな、『神』とやらに操られているのだろう。これでいよいよ、本当に神なのかどうか、怪しくなってきた。

「せいっ！」

ひとまず、手近の住民の腹を殴って昏倒させる。それを皮切りに、大勢の住民が僕に向けて警戒してきた。一斉に何の感情も映さない瞳に注目されるのは、心臓に悪いね。

頭を狙って農具を振りかぶってきた人には、手にハイキックを決

めて取り落とさせた後、腹を殴打して気絶させる。どこから飛んできた包丁をシルヴァリオンを一瞬だけ抜いて切り伏せ、殴りかかってきた人にはその力を利用して投げ飛ばす。

手加減しているとはいえ、所詮は操られた自我のない人形のようなもの。ほとんどの住民を昏倒させるのに、それほど時間はかからなかった。

リックイーたち3人を拘束している手錠を魔法でこじ開け、ようやく彼らを解放する。

「ま、魔術師が体術だけで……非常識だわ」

「やっぱり、俺の見る目は確かだったな」

「おお、ありがたい助かりました！して、これはどうなっているのですかな？」

三者三様の反応を返しながら周りの把握を努める。あらかたのことを説明し、ウサギちゃんの救出に急ごうとするが……

「あ、じゃあ、私も……」

「いや、今回はかなり大物っぽい。はっきり言うと、足手まといだ。

だから、三人はなんとかこの町から脱出を」

「おい！お前言うようになったじゃねえか。こいつらはともかく、俺様が足手まといだと！？」

「ああ、そう言ってるんだよ『リッキー』。正直、キミらを守りながら相手にできるかなんて、分からない。今回の敵は、この町全てもだ。キミは、それを敵に回せるって言うのか？」

「ぐっ……」

「……行こう。確かに、私たちじゃリツの足手まといだよ」

俯きながら、一言。シルヴィアは沈んだ様子で、言った。

それは、直に僕の実力を、一部とはいえ目の当たりにしたシルヴィアだからこそその判断だったんだろう。これには、僕も感謝しなければならぬ。

ちなみに、マーカスさんはそのたるんだ腹を震わせながら、終始オロオロしていた。

「でも、リツ。必ず生き残るのよ。私、ルクレール魔法大国の王立魔法学院に向かうから。これが終わったら、会いに来て」

「えっと、僕の目的地とはだいぶ違うような……」

「ふざけないで。勝手な単独行動を取る以上、無事だつて言うことくらい確認させなさいよ。それでも、私たちはパーティなんだから」

「あれ、いつの間に!？」

「返事は!？」

「ハイツ!！」

満足そうによろしい、と頷くシルヴィア。あれ、僕もキミも、リックイーが「パーティ組もうぜ!」って言ったとき、ボロクソに否定しなかったっけ？

リックイーも、なんだか微妙な顔してるし。すごい強引だなあ、シルヴィアは。

もう一度「いいわねっ!？」と釘を刺した後、シルヴィアたち3人は、定期船が出ている町へ旅立った。まあ、これは一時の別れだと思っし、いつかみんなとも再会できるだろう。

さて、ウサギちゃんを助けなければ。そう思って踵を返した瞬間、海から立ち上る魔力の奔流。

その覚えのある魔力を見た瞬間、僕はそちらへと走り出していた。

顕現する神と一時の別れ（後書き）

自称神様が現れるシーンは次回！って言っても、冒頭で色々ネタバレしちゃったね！

神様の容姿とか、そう言うのについても次回！これは意図的に隠したよ！

とにかく色々な疑問は次回！

……いや、説明が面倒なわけじゃないですよ？そんなわけないじゃないですかハハハ

ともかくにも、リッキーとシルヴィア（ついでにマーカスさん）離脱。

少しの間ですが、出てきません。

いや、この人たちは今後も出てきますので、ご安心を。

これからしばらくは、おふざけ抜きです。リツ君、存分にカッコつけます。

そして、自分の厨二くさい姿を思い出して悶絶するでしょうw

それでは、また自戒！じゃなかった、次回！！

厨二と言われようがガチバトル(前書き)

難産でした……

なんというか、シリアスでまとめようとしてるのに、絶対ポケ入れ
ちやう。

話的には結構ダークなのに……

厨二と言われようがガチバトル

海が一望できる砂浜。立ち上る魔力の奔流。その起点には、目を閉じたウサギちゃんの姿があった。青いオーラを纏うその姿は、禍々しさと同時に、どこか神秘的でもある。

遅かったか。駆けつけた僕は、ここで組み立てられている魔術の術式を解析するために目を凝らす。

「……ウサギちゃんの体に、膨大な魔力が集まって……まさか、これは!？」

ウサギちゃんに何かをしたのかと思ったが、コレはどうやら、神とやらがウサギちゃんの体に入ってこようとしているみたいだ。規則性のない、濁った魔力が、海から際限なくウサギちゃんの体に入り込む。すでに、彼女の意識はない。

一際強く魔力が発光すると、奔流と共に吹き荒れていた風は収まっっていく。そして、再び目を覚ましたウサギちゃんは、もうすでに別人と化していた。なにより分かりやすい変化は、普段は赤い瞳が青くなっただくらいか。

「アーセナル様が、降臨なされたぞーッ!！」

「「「「「おおおおおお！！」「」」」」

どこら辺から正気に戻っていたのかは知らないけれど、町の住人たちが歓声を上げる。彼らはどうやら、これが当然のことだと思いつ込んでるようだ。それが暗示なのか、または別の理由からかは、知らないけれど。

なににせよ状況を見るに、完全にみんな、この目の前の自称・神の信者みたいだ。これは……骨が折れるな。

そして、前回の冒頭に戻る（メタ）。

魔王の残滓。強烈な魔力。多勢に無勢。脳裏に単語が浮いては消える。

目に見える限りで、ざっと住民は50人以上。そして全盛期の魔王と遜色ないように感じる目の前の自称神。

なんで欠片のはずなのに、元と同じくらいに力を取り戻しているのだろうか。……って、答えは信仰か。

人の祈りや想いの力は強い。それこそ場合によっては、不可能を可能にすることくらいは造作もなく出来てしまうほどに。

そういえば、遙か昔(って言うても僕からしたら2、3年前だけど)に、神降ろしの巫女って言うのがいたなあ。あの一族にしか受け継がれず、膨大な力を受け入れるが故に短命な一族だった。もしかして、それと同じ現象だったり？

「やれやれ……一応聞いておくけど、あんたが乗っ取ってるその娘の体、どうする気？」

『どうもせぬ。そも、我はこの世に数刻も顕現できぬ故、問答をしている場合ではないのだ』

「……あ、マジで？」

ぼんやりとした目でこちらを見つめるウサギちゃんの瞳に光はなく、口がひとりでに動いているような印象を受ける。その真っ赤な唇から洩れ出る声色は普段の乱暴なものではなく、暖かくも冷たい、感情を読ませない口調に変化していた。

……ってかあれ？もしかして、これって僕何もしなくていいんじ

やない？

ウサギちゃんに危害がないのなら、別に問題ないだろうし。やり口が気に入らないけれど、無事ならいいよね。

そもそも、神が胡散臭いってだけで、この大陸の人たちみんな普通に生きていけるし。魔王の残滓があるだけで、魔王みたいに全世界を混沌に陥れようなんてしてないみたいだし。

うわ、じゃあ僕、その人がただ怪しいってだけで殺そうとした、頭のおかしい人じゃん。恥ずかしいわあ……まあ、生前の魔王を知る人なら、魔王の魔力感じれば誰だってこうなるだろうけど。

「でも、ならなんで姿を現したんだ？理由がないなら、他人の体を使ってまだ」

「アーセナル様！この子とこの子が、今年生まれた赤子にございます！」

僕が質問を続けるのを無視する形で、横から入ってきた女性が腕に抱えた2人の赤ん坊を神に差し出す。どうやら、神が顕現した理由が、見られるらしい。

神はひとつ頷くと、指を赤ん坊の額に当てる。すると、それぞれの赤ん坊の額には、魔法陣のようなものが浮かび上がって、消えた。咄嗟に解析したけれど、なんの効果があるかとかは分からなかった

な。結構、巧妙に隠蔽されていた。そしてありがたがる人々。

……明らかになにかあるだろ、あれ。この時代の魔法レベルからして、解析とできないのが大半な気がする。なんでこんなに世界のレベルが下がって……いや、『神』が意図的にやったとかか？自分たちに逆らう力を、人類が持たないように。

こりゃ、しつかり読み取った方がいいな。どうやら額に施すようだし、適当な住民の額を見てみるか。

「……………ん？……………ツ！？」

そして、気付いた。気付いてしまった。この広場にいる住民全員
の精神力が、ウサギちゃん……………正確には彼女に宿った神の中へと取
り込まれていつている。

少し覗いただけだが、あの魔法陣はおぞましすぎる。黒い魔力の
化け物が、人間の体内を喰い散らかしているのだから。

全身の皮膚に鳥肌が立った。そう言えば、この集まっている人た
ちはなんだか、実年齢よりも老けているように感じていたのだ。

そして、この『神』に自ら自分たちの生命力を差し出す住人たち
に、怖気を感じた。なんとというか、この町の人たちは……………人間じゃ
ない。そう感じるのだ。

「あのさ、カミサマ」

『なんだ、太古の怨敵よ』

「僕、あんたがしている小細工、分かっちゃったよ」

やっぱり。僕のことは知ってるんだね。なら、話は早い。

これからするのは、僕の自己満足。住民の人たちからすれば、ありがた迷惑かもしれない。なんせ僕がなにもしなければ、少なくとも寿命が尽きるまでの間、なにも知らないまま生活して、また何も知らないまま死んでいくのだから。

だけど、このまま自称『神』が人々の命を我が物顔で吸い尽くしていくのを見ることは、できなかつた。命をかけて守りぬいたと思っていたこの世界の平和が、僕らみんなの想いが、汚されているように思えるから。

なら、やっぱり僕は僕のワガママを貫き通そう。世界が敵？上等。相手は神？上等。何も知らない連中は僕を神殺しだと責め立てる？

……じよ、上等ッ……！！

殺し損ねたこの外道野郎を、今度こそ完膚なきまでに叩き潰す。

油断もなにもない。最初から最強の魔法剣で、一撃で、仕留めてみせる。

さて、今回のこの邂逅で知り得た、この時代の現状を纏めよう。

まず、僕らが倒したと思っていた魔王は、いくつもの欠片になって散らばり、それらは神と自称する化け物になった。

いつからかは知らないけれど、この自称神は口八丁で民衆を騙し、人々から生命力を吸い取っている。これは間違いない。

その神（寄生虫）は、今現在ウサギちゃんにとり憑いてる状態で、迂闊に手を出せない。

何より問題なのは、民衆がそれを自らすすんで受け入れていてる節があり（まあ、実態を知っているかは別として）、ここで僕がこの寄生虫野郎をぶち殺しても、悪者になるのは僕だということ。

また、コイツのように各地に存在する神（寄生虫）が、各地で同じようなことをやっている可能性が高いということ。あれ、もしかして僕、全世界から指名手配じゃね？

人類のためにやるのにまさかの悪役。いやはや、本当に人生ままならないや。弓兵エミヤンもびっくり。

「とは言え、正直どうにかする目星はついたのだけけれど」

『なにをブツブツと言っているのだ。しかし、ふむ。この世界の仕

組みに気付いたというのか』

「まあそういうこと。さて、あんたがオイタする前に手は打たせてもらおう。『空間隔絶』」

『ぬっ？』

今まで目に映っていた、住民たちがこいつに「へへっ」ってやっている姿が、にじむように掻き消える。風景だけはそのまま、たいまつの赤々とした灯に照らされた、港町の砂浜に立っている。

僕が使ったのは、空間の座標をズラし、使用者と対象だけを異次元に強制移動させる荒業だ。詳しい理論は僕も分からん。ミュールに聞いてくれ。

つまり今現在、ここには僕と神しかいない。さすがに、信者どもに囲まれたあの状況でコイツに「この男は魔物だ！やっつけてしまえ！」みたいなこと言われたらやばかった。

あとはウサギちゃんから野郎を引きずり出して、フルボッコタイムです。

『ちっ、小癩な』

「化けの皮が剥がれてるぜ、自称カミサマ。今更だけどね」

『……まあ、ちょうどいい。悠久の時を経て、我は更なる力を手に入れた！あのときの屈辱、今晴らさせてもらうぞ！！』

言うなり、黒ウサギちゃん（便宜上そうしておく）が僕に突っ込んでくる。視界で捉えられないほどの速度だが、あいにくと僕はそんな相手との経験には事欠かなかった。凡人が超人と戦うには、相応の努力が必要だったとだけ言っておこう。

腕に魔法陣を出現させた黒ウサギちゃんは、僕の胸に向かって右腕を突き出す。魔法陣の効果か、推進力を得た右ストレートは、音を置いていくほどの速さで僕の胸に吸い込まれていく……が、僕もさすがに黙ってやられるわけがない。

相手の腕にちょうどいいタイミングで手を当て、体ごと回転して攻撃を受け流す。目に見えないから、勘頼りだ。

黒ウサギちゃんが凄まじい勢いを殺さずに振り切ってくれたため、多少よろけた。そこを見逃せるほど、僕は甘くない。

がら空きのわき腹に手を当て、どっかの筋肉バカに教わった技を思い出す。確か……こうだったはず！

足を踏み込み、そこから生まれる螺旋状のエネルギーを腰に伝え、肩に伝え、腕に伝え、手のひらに伝え、勢いよく捻りながら押し出す……ッ！

「はっ！」

『しっつぷうしっつうー！？』

鋭くかけた掛け声と共に、黒ウサギちゃんのわき腹に掌底。体全てを使って放たれた一撃は、綺麗に黒ウサギちゃんにクリーンヒットした。

0距離からの殴打とは思えない衝撃に、黒ウサギちゃんは何が起きたのかも分からずに吹き飛んだ。口の端から、血が少したれている。

しかし、なんとまあ……ここまでとは思わなかった。まさか、魔法の攻撃力だけじゃなく、身体能力まで上昇しているとは。

力を長年溜め込んできた相手だが、感覚的に相手の動きが分かる。目に見えるんじゃないかと、分かるんだ。

奴自体の強さは、大体魔王よりも若干弱いくらいだ。いや、ウサギちゃんという器に入って、さらにもう一段階弱体化している、か。

『ぐう……！やってくれたな！！ただで済むと、思うなよ……ッ
『！』

「じゃあ、その器から出たら？あんたからしたらやりにくいでしょ」

『ふ、ふふふ……なるほど、貴様はこの器が死ぬのは避けたいと見える。ならば！貴様がこれ以上余計なことをすると云うのなら、我はこの器を壊してくれよう！』

そういつて、黒ウサギちゃんは、長く変化させた爪を、自らの喉へ突きつけた。ありていに言う人質だ。実際、ウサギちゃんとは少し前に知り合っただけで、ただの知り合い。仲間ですらない彼女は、僕なら簡単に切り捨てることだって出来るんだけど。

「おい、おいおいおい、生言ってんじゃ……ねえよ」

外道すぎるだろ、こいつ。汚い、さすが神（笑）汚い。

こつやってふざけてはいるが、実は僕、ぶち切れちゃってます。いやね、さすがにこれには腹に据えかねるものがあるわけですよ。

魔王のときはまだ、矜持とか礼儀とかはしっかりしてた、一本筋の通ったやつだった。世界を統べるとかイタイこと全力でやってちゃった迷惑野郎だったけど。

でもさ、5年間決死の覚悟で戦って、ようやく魔王を打倒した結果がコレかよ！！

「やるせねえええ！！」

『ぬおおおっ！？』

気当たりというものをご存知だろうか？一般的に言う殺気などで、相手を威圧して「蛇にいらまれたカエル」状態にするやつだ。

それを魔力を大放出することで、擬似的にだが起こすことができ。これは、ゴースト系の魔物やらが人に取り憑いたときに、引きずり出すのに有効なのだが……。

『ぐうつ、なにが……………あれ！？』

神にも有効みたいです。しかも、展開について行けずに「あれ！？」とか言っちゃってるし。

気当たりで、神はウサギちゃんからトウルンって出てきた。いや、実際はズアアアアア！って感じだったけど、すごいあっさり出てきたから。スツと、ウサギちゃんの瞳の色が、元の赤に変わる。

神が体から抜けたことで、気を失ったようだ。ウサギちゃんはその場に崩れ落ちた。

現れた本体は、まさに醜悪の一言。黒くて、なんかグチヨグチヨウネウネって感じた。オルゴデオーラ最終形態よりキモい。大きさはありえないほどデカく、明らかにこの前の竜種より大きい。大体、10メートルほどか。

ぺいつと弾き出された神とごうのまへがましがなんかプルプル震えている。……せめて、最後まで悪役らしい態度は保って欲しかった。なんだよ、魔王に勝って喜んでた自分が、すげえ恥ずかしいじゃんか……ッ！

『ぬぐぐ……ッ！』

「おら、それで本来の力出せるんだろ？死力を尽くせ。あるいはこの身に」

『ち、チクシヨー！やったらー！！』

「最後まで言わせるよ……！」

もう、最初の頃が見る影もない神は、僕に向かって飛びかかってくる。なんか氷の矢とか炎の剣とか飛んでくるが、全て半身になってかわす。

残り5メートルほどの地点で、神が腕……というより触手を伸ばしてくる。槍のように尖った切っ先は、刺されば確実に命を奪うだろう。

その触手をこれまた半身になってかわし、すれ違いざまに剣を抜きつつ切り落とす。足は、未だ止めない。

『ぐ、おお………』

「『シルヴァリオン』………4属性纏装^{てんそう}！」

残り2メートル。相棒である魔剣シルヴァリオンに、炎・水・地・風の4属性を纏わせる。これが、今現在で僕にできる最強の魔法剣。

残り0.5メートル。苦し紛れに放ってきた電撃をあえて受けながら、高く飛び上がった。いてえ。

準備完了の魔剣を、大上段で頭上に構える。落下が始まったと同時に振り下ろし、気合と共に神を切り裂く。

「塵も残すなあああつ!!」

魔法剣『フレア』

『ぬおおおお！？』

4色の光が、神を中心に迸った。普段より、遥かに強い光。頭から真つ二つにされた神は、体の端から砂が崩れるようにサラサラと消えていく。口（？）を大きく開け、天を仰いだまま、硬直して動かない。

剣から放たれた光は、ちゃんと神を滅せたようだ。通常の魔法剣は、剣がうつすら光るくらいなんだけど……。ウサギちゃんも、無事みたいだ。これで、今回の騒動は全部終わった。かも。

「はぁ……やっちった」

この町の人々から希望を奪ったことに対してか、あまり多用するなど言われていた技に対してか、はたまた別の理由でか。

自分にも判別できないけど、一言呟き、満天の星空を1人で眺める。

神を殺して感じるのは、虚しさだけだった。

厨二と言われようがガチバトル（後書き）

とりあえず序盤のボス、撃破。

なにげに苦戦せず、あっさり勝っちゃったリツくん。最強も伊達じゃないですね。

時々こんな風に、大一番ではリツ君が本気出します。徐々に口調が汚くなっていったリツくん、ぶち切れですねw

さて、これで予定していた一章の山が終わりました。残り2、3話で二章にうつれるかと。

二章では、皆様お待ちかねの……おっと、ではまた！

拳帝の意思を継ぐ者（前書き）

難産だった……！

拳帝の意思を継ぐ者

パリン、と見上げた夜空に亀裂が入る。ここら一帯を覆っていた結界が、崩れたのだ。

術式の消滅を確認して、ぐったりしているウサギちゃんを背負い直す。腰の慣れ親しんだ重みと、背中にかかるわずかな暖かさが心地いい。

聞こえてくるのは、突如として消え去ったウサギちゃん（神）を探す住人たちの声。戦いを挑んでから大分時間が経っているようで、水平線にはわずかに朝日が顔を出している。

「ふう、行こうか」

目指すは、ルクレール魔法大国へと向かったシルヴィアたちとの合流だ。海岸線に沿って歩けば、定期船を出している港にたどり着けるかもしれない。

本当はここで船を調達したかったけど、この状況じゃ無理っぽいし。

……当初の目的はアーガルド王国だったのに。一体いつになったら到着することやら。

ざわつきが怒声に変わり始めた頃、僕はウサギちゃんを背負い、港町アーセナルに背を向けた。

アーセナルを出発して1週間。海岸線に沿って北上していき、途中見つけた街や村で補給をしながら旅を続ける。

ウサギちゃんも3日くらいで全快し、今では元気に走り回っているよ。

欠伸をしていると、ウサギちゃんがこちらに走り寄ってくる。右拳を引き、全身を弓のようにしならせ、踏み込んだ左足で地面を砕いて……。

「だりゃあっ!!」

「虚実織り交ぜない拳打は致命的な隙だよ。もっとフェイントとか入れないと」

「え……んぎゃっ!？」

ほら、走りすぎて足が纏れてしまったみたいだねはっはっは。

……………いや、散々殴られた腹いせじゃないデスヨ？

ウサギちゃんは格闘家として、高水準の能力を持っていることが分かった。ただし、”この時代の人間にしては”という言葉がつか。

バーンの嵐のような攻撃に比べれば、そよ風と形容してもいいかもしれない。あの時代は、そんな『超一流』と呼ばれるやつらがごろごろいた。

ということ、そのバーンから直々に格闘術の手ほどきを受けた僕は、当然ウサギちゃんよりも強いわけで。

地面に転がったまま、ウサギちゃんが恨めしそうにこちらを見ている。可愛い。

「ちつくしょう……なんで魔術師なのに格闘がこんなに強いんだよ……」

「ウサギちゃんが弱いんじゃない？」

「あたしは一応ランクBのベテランだったの！」

「ランクが高いからって、それは強さには関係ないだろうが。そんな気持ちで慢心を生むんだよ。僕なんかほら、ランクEだぜ？」

「それは”師匠”がおかしいんだよ!!」

……はい、ウサギちゃんの格闘術のお師匠をすることになりました。

僕はまだまだバーンにも勝てない錬度だけれど、さすがに今のウサギちゃんに教えられるくらいには強い、はず。

剣に魔法にと何でもありのパーティー内決戦では、勝率6割と結構強かったんだぜ。キラント。

「でも実際、自分のランクが高いからといって驕るのは弱者の証拠だよ。ウサギちゃん、強くなりたいんなら、驕りは捨てる。相手が自分より弱く思えても、絶対に侮ることだけはするな」

「うぐっ……分かったよ」

「よろしい。ほら、今日は終わりにしよう。晩御飯ができてるよ」

「……いつの間につつたんだ？」

「組み手中に」

「ば、化け物だ……」

魔法でちょちょいとね。いやあ、生活密着型魔法も開発しといてよかった。時間がないときとかは、手間が省けていいね。

街道の脇にテントを張り、焚き火でスープを暖める。固めのパンと一緒に、簡素な食事を終えた。

基本的に、僕はウサギちゃんがテントで寝た後、外の見張りをしている。半分寝た状態で休み、何か起こったらすぐ覚醒出来るように訓練した僕は、見張りとしてはかなり優秀だ。

漫画の世界でもあるまいし、「はっ、人の気配!？」みたいにキュピーンと起きるなんて事はできません。だって、どんなに鍛えても人間なもの。寝ている間は無防備なのです。

ウサギちゃんを弟子に取るきつかけとなったのは、ウサギちゃんが目を覚ました日の夜。僕が月を見て、ミュールを思い出しているときのことだった。

「月が綺麗だなあ……」

「なに黄昏てんだよ」

「……う、ウサギちゃん？早く寝ないと明日も早いよ？」

「うるせえな、あたしだってちょっと眠れないときだってあるんだよ」

やばい、黄昏てるところ見られた。超絶恥ずかしい。

ウサギちゃんは呆れた顔でテントから這い出し、僕の隣に座った。さっぱりと切った肩口までの茶髪は、月明かりにキラキラと光っている。性格をあらわすかのような釣り目気味の瞳は、眠気からかウルツとしていて、思わずドキツとしてしまう色気がある。

そのまましばらく、2人で月を眺めて。不意にウサギちゃんは、口を開いた。小柄な体躯に似合わないハスキーな声が、妙に耳元で鮮明に聞こえる。

「神を……殺したんだよな、あたしたち」

「うん、僕1人でね」

「これから追われるかもな、あたしたち」

「うん、僕1人がね」

「……それでもあたしは、神と戦い続けるぜ」

「前回戦ったのって僕だけじゃ……」

ドガツ、バゴツ、ボカツ!!

） Take 2 ）

「神を……殺したんだよな、あたしたち」

「ソウデスネ」

「これから追われるかもな、あたしたち」

「ソウデスネ」

「それでも……それでもあたしは、神と戦い続ける！あんな理不尽は、絶対に見逃せないぜ！」

「……ウサギちゃん、女優になった方がいいんじゃない？」

「だから、手を貸してくれないか？あたしたちの世界は、神なんかに好きにさせない。あたしたちの力で、神からこの世界を取り戻してやる！！」

「話を聞かないところとか、バーンみたいだよね」

ふう、と一息。本当に、なんだかこの子がバーンに見えてきた。あの脳筋のバカのろくでなしと一緒にするのはかわいそうだけど、あいつが魔王城突入前夜に語った言葉と、ウサギちゃんの語った言葉は酷似しているのだ。

「俺は今まで、自分の腕を磨くことにしか感心がなかった。ライトほどお人好しじゃねえし、ウィンディほどみんなのためにできることはねえ。ミユールは世界のために魔王を止めるって目的があつたし、俺たちの中じゃ一番弱かったリツでさえ、誰かを守るために強くなった。それに比べて俺は、自分のために、ひたすら自分のために何も考えず戦ってきたんだ。でも不思議だぜ……あんな禍々しい城を見ているとき、別の気持ちが湧いてくんだよ。魔王なんかには、俺たちの世界を好きにさせたくないって、な。だからさ、みんな。手を貸してくれねえか？俺の、俺たちの世界を……取り戻すんだ」

口下手なバーンが、必死に紡いだ言葉だった。要領を得ない、ただどどしい彼らしい言葉だったけど。僕らの心は、1つになったんだ。

今、ウサギちゃんは世界の秘密に気付き、何とかしようともがいている。光を、その胸に抱いて。今は小さな光だけれど、これから先、大きく大きく成長していくことだろう。もっともっと、強く光っていくだろう。

ふと、この子にバーンの技術を教えたらどうだろうと思った。彼と同じ格闘家のウサギちゃんだ。僕と違って才能もある。

「……………？どうしたんだよ」

突然立ち上がり、街道脇の原っぱへと歩いていく僕に、ウサギちゃんは怪訝そうな声を上げる。慌ててついでにきたウサギちゃんに、僕は掌底を突き出した。

「……………ッ！？」

ウサギちゃんは反応できずに、目を驚愕で見開く。僕はウサギちゃんの額の１ミリ前で、掌底を止めた。拳圧で、ぶわりと前髪が浮き上がる。

自分の置かれた状況を遅れて理解したウサギちゃんは、ドツと汗

を噴出し、腰を抜かして肩で息をした。顔を蒼白にし、ガクガクと震えている。

当たり前だ。明確な死をイメージしてしまった分、恐怖はより鮮明に全身を縛り付ける。

「はっ、はっ、はっ……！」

「キミは、弱い」

あの自称神。さすがは魔王の魂の欠片。800年もの間力を蓄え続けただけはある。

事実、なぜか能力が底上げされているらしい僕でも、それなりに苦戦したのだ。もっと強い神なんてほかにもウジャウジャといるだろうし、これから戦いは苦しくなるはずだ。

そんな中、今のウサギちゃんのような中途半端な強さでは、すぐに死んでしまうだろう。

「あの神は末端の方だろう。実力的にも、強くはなかった。でも、末端の神ですらキミじゃ勝てなかった」

「……………ッ（わっ）」

「たしかにキミは強いほうなんだろうさ。でもね、魔術師の僕に、格闘で地に這い蹲らせられて、それで神に勝てると思ってるの？」

……笑わせるなよ。

出来る限り冷たく言ってみる。ここで心が折れるようなら、この子は戦うべき人間ではなかったのだ。

悔し涙を流しながらこちらを見上げるウサギちゃんは、歯を食いしばって僕をにらみつけた。地面に染みが広がっていく。失禁してしまっただけらしい。

だけど、僕は笑わないし彼女は恥じない。生命原初の恐怖を味わったんだ。当たり前だろう。

ひざをガクガクと震わせて何とか立ち、ウサギちゃんは僕に、深く深く頭を下げた。

「稽古を……稽古をつけてください……！」

こうして、僕の最初の弟子は、屈辱と無力感と自身への怒りに燃えて、拳を握る覚悟をした。

「可愛いなあもつ」

「ふがつ……むにゃむにゃ」

いびきをかいてグースカ眠る愛弟子の頭を撫でながら、数日前の出来事を思い返す。旅をしながら修行をつける毎日のうちで、だんだんとウサギちゃんが妹のように思えてきてしまったのだ。

恋慕ではないが、愛情が芽生えてしまったのは事実なのでしかない。急激に自分が老けたように感じる。

目と鼻の先には新しい港町ヴィクサス。ここ野営地点から、明るい光がキラキラと遠目に望める。ついに、この因縁の大陸から旅立つのだ。

「ぐがあ……師匠クロス」

「ど、どんな夢を見ているんだろっ」

拳帝の意思を継ぐ者（後書き）

はい、というわけです。

なんとも泥臭い、汚泥にまみれた立ち上がりを見せたウサギちゃん。一度屈辱を味わった人間は強いですよ？いままではちょっと違う雰囲気を見せていただきました。

旅立ちは異臭に彩られて（前書き）

この話で、とりあえず1章は完、です。

というか、クオリティが低下している……orz

なんとかせねば！

旅立ちに異臭に彩られて

港町アーセナルを脱出してから早ひと月。ただひたすら北上してようやく大きな港町にたどり着いた。このリセリア大陸とも、ついにお別れなのである。思えば魔王を倒すために前の時代でこの大陸に上陸してから、時空移動してからも合わせて半年以上になる。そう思うと、なんとなく感慨深い。

「おい、師匠。次はどこに行くんだよ？」

「ルクレール魔法大国の、王立魔法学院。ここからちょうど北の方角だね」

「うへえ、年中銀世界で有名な、あそこかよ……」

まあ、シルヴィアやリッキーとの約束がそこだから仕方ない。本当は、このまま北東のアーガルド大陸に行きたいんだけど。

そうそう、この前世地図をちらつと見る機会があったんだけど、どうやらところどころ僕が知っている大陸名と変わっているみたいなんだよね。アーガルド大陸とか、ルクレール魔法大国のあるセルヴァ大陸や、このリセリア大陸は変わってないみたいんだけど。かつて暗黒大陸と呼ばれていた場所にいたっては跡形もなくなっているし。

暗記するまで読むことは出来なかったけど、暗黒大陸が消滅している以外は、少なくとも大陸の位置が変わっているなんてことはないみたいだ。さすがに、1000年くらいじゃ大陸そのものが大きく移動したりはしないよね。……ホントに何があったんだろう、暗黒大陸。

ここ最近どんよりと曇っていた空も、今日はカラッと晴れている。海から吹きつける潮風が、髪をたなびかせて清らしい。

「んつと……あ。師匠」

「どうしたウサギちゃん？」

「あのさ、言にくいんだけど……」

僕より先行して、船の便を見ていたウサギちゃんが、なぜか困ったような声をあげる。

「この船、セルヴァへの便はないみたいだぜ？」

「……………」

セルヴァへの便はない……ということはルクレールに行けない……
仕方ない、アーガルドへ行こう！

ポクポクポク……チーン！！

「進路変更、いざアーガルドへっ！！！」

「おいおい、いいのかよ。仲間がルクレール魔法大国で待ってんじやねえのか？」

「何をおっしゃるウサギさん。北のセルヴァに行けないなら、北東のアーガルドを経由すればいいじゃない……ッ！」

「な、なるほど……？」

そう、元々アーガルドには行こうと思っていたんだ。それが少し、早まっただけ。

親友たちの末裔が、どんな風に国を治めているのかも気になるし、
ね。

というわけで、さっそく2人分の運賃を払って乗船。いざ、アー
ガルドへっ！！

「……………つえぶ」

「大丈夫かうサギちゃん」

「……………ム、リ」

「うわぁ」

船に元気よく乗り込んで2時間。大海原を進むこの船は、北東のアーガルド大陸を目指している。立派なつくりの大型な船で、動力は魔石だ。

魔石とはその名の通り、魔力を豊富に宿す石のことで、天然の魔力の力場において生産される。自然発生型の化石燃料みたいなものだ。まあ、石油みたいに膨大な年月がかかって作られるものではないが。せいぜい、10年20年といったところだろう。

そんなわけで、この船は魔石のエネルギーから推進力を得て、前進しているのだ。

風を受け、ごうごうと音を立てて海原を突き進む姿は勇壮の一言。次々と甲板を走り回る船乗りたちは、日に焼けた屈強な姿を見せ付ける。時折みせるキラリと白い歯は、浅黒い肌と対比して余計に白く見えた。

「はあ、はあ。なん、で、こんな、に……揺れるん、だよ……」

「あちゃあ、ウサギちゃん乗り物ダメなんだね」

「揺れに加えて、ウブツ。ガチムチ、のおっさんたちが、汗光らせて……うづうづっ！……甲板を踊り狂ってたら、吐き気も……す、す、するうづう……」

「うわっ、やめっ……今までスルーしてきた光景が、急に気持ち悪く見えてくる……」

だが、このように荒っぽい運転では、船体が揺れる揺れる。さらに船乗りたちは、モップを片手に甲板を走り回る。確かに、少し刺激の強い光景だ。いや、船乗りたちは掃除しているだけで、別に踊り狂ってはいないんだけど。そしてたまに聞こえてくる、暑苦しい掛け声が、拍車をかける。

ついにウサギちゃんは、ダウンしてしまった。脂汗の噴き出た青白い顔で吐き気をこらえる様は、とてもじゃないが女の子には見えない。

「ヴウウウ……も、もう限界……オロオロ！」

「うぐっ、も、貰いゲロだけはしないぞ……」

「オロオロオロオロ……！」

『面舵一杯！ヨーソロー……！』

「う、う、うぷっ」

慌てて青く輝く海面に、ウサギちゃんはバーストする。それを見て背中をさすってあげてた僕も、つられて吐き気を催してしまった。

しばらくの間、この駄目師弟コンビは、清しい大空の下、母なる海に向かって盛大に……。

空が夕日で赤く染まる頃、船はアーガルド大陸の港、グリーンバラ港へと到着する。地に足をつけた途端、2人の男女は安堵のため息を同時に吐き出した。……もちろん、僕とウサギちゃんだ。

乗船前と後でやつれ具合が半端じゃない。げっそりした足取りで、ここから数里先にある王都アーガルドへと歩き出した。

「それにしても……」

「ん？どうした師匠。なんかあったか？」

「んや、なんでもないよ」

港に着いたときから思ったんだが、人々の活気がない。帝国とやらと長い長い戦争状態で、国自体が疲弊しているのかもしれないが……。

それとはまた違う、生気のなさが気になる。すれ違う人みんな、死んだ魚のような目をしているのだ。

昔は整備されていたであろう、荒れた街道を歩く。建て看板を見る限り、このまま道なりに進めば、王都アーガルドへは半刻もしないうちにたどり着けるだろう。

「ううん。なんか、気味悪い国だな、ここ。この前のアーセナルみたいだぜ」

「ああ、確かにあそこと似てるね。ただ、ここはあそこと違って生きたる気力をこつそり抜かれたみたいだ。やる気が湧かない、どうせやっても意味がない。そんな感じの、どこか諦めの入った暗さだよ」

「なるほどな。アーセナルの人たちは、操られていたときこそ人形みたいだったけれど。神が降臨したときの熱狂ぶりとか、こことは細かい差異があるよな」

「そんな意味では、ここのほうがアーセナルより不気味な気がするんだ。ウサギちゃん、僕から離れないようにしてね」

「うえーい……あーあ。こんなことならグリーンバラ港で、セルヴァア行きの船が出るまで待ったときゃよかったぜ」

「まあ、その船が出るのは少なくとも1ヶ月後らしいけどな」

そう。すぐさま乗り継げなかったのは、定期便がしばらく運行を停止するからだ。理由はわからないが、これによりセルヴァへの便は出なくなってしまった。元々、なんとかウサギちゃんを説得してアーガルドへ寄ろうと思っていた僕だったが、なんとなく嫌な予感がする。

このまま、アーガルドに向かっていいのか……？

「……ええい、なるようになれ！」

まあ、考えても答えが出ないものは仕方ない。僕はアーガルドで、
僕らの始まりの地で、何が起きているのかを確かめるだけだ。

……だが、考えてもいなかった。ここで思いもよらない再会と、
別れがあるとは。

僕がなぜ、この世界に呼ばれたのか。僕がなぜ、この時代へジャンプしたのか。

すべてが分かるのは、いつになるんだろうか。

旅立ちに異臭に彩られて（後書き）

次章予告！

セルヴァ大陸に向かっていった律とウサギちゃんは、思いがけずアーガルド大陸へと上陸してしまった。そこで出くわしたのは、生気のない人々と、変わり果てたかつての……。

「なぜだ……なぜお前が……！」

「くっ、師匠……逃げてくれ……！」

「あら、やっぱりあたしがいないとダメね、あんたは」

「未完成の魔法剣……今ここで、完成させる！」

乱れ打つ魔法、飛び交う厨二！悶えるリツ！！

最後に立っているのは誰か。そして物語は、加速する……！

なんて予告しちゃったけど、この通りに行くかなんて分からないのさ、ウシシ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4921v/>

時と世界を越えた魔法剣士

2011年9月22日01時17分発行